

鹿角市文化財調査資料 32

大湯環状列石

周辺遺跡発掘調査報告書(3)

1987-3

秋田県鹿角市教育委員会



環状列石周辺発掘区



切断蓋付土器（C区溝構外出土）

序

特別史跡「大湯環状列石」及びその周辺の解明を目的に、昭和59年から継続してきました大湯環状列石周辺遺跡の発掘調査も、本年で3年目となりました。この間、かなりの数の遺構や遺物が検出され、これらの調査結果は今後の史跡整備のための基礎資料の一部となっております。

特に、野中堂遺跡の北東300mの地点の配石遺構群域の調査では、秋田大学名誉教授加納 博氏、岩手県立大学助教授中野益男氏等の御協力により自然科学分野からの追求もなされ、大湯環状列石の性格、構造等の解明にとって貴重な資料を得ることができました。

本年度は、配石遺構群域の拡張部分と、万座遺跡付近の二ヵ所を調査しましたが、配石遺構の分布の規則性がある程度把握でき、当時の幕制を考察する貴重な資料を提示できました。また万座遺跡付近の調査結果は昨年の野中堂遺跡近傍の調査とともに、環状列石周囲の遺構の分布、集落の構成を考える上での一資料と言えます。本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。

調査に関して、御指導、御協力いただいた関係機関、各位に厚く御礼申し上げるとともに、本書が今後の大湯環状列石の保護と学術研究に役立つよう念ずるものであります。

昭和62年3月

鹿角市教育委員会

教育長 柳沢源一

例 言

1. 本報告書は、昭和61年度に国庫補助金を得て実施した大湯環状列石周辺遺跡第3次発掘調査の報告書である。本調査概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2. 本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に明記した。

3. 資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

奈良教育大学教授 三辻 利一 火山灰の螢光X線分析

岩手県立博物館 赤沼 英男 黒色樹脂及び赤色顔料の分析

秋田県立十和田高等学校教諭 鎌田 健一 石器石質鑑定

鹿角市立尾去沢中学校教諭 成田 典彦 磯群石質鑑定

4. 土器・土器などの色調の記載には「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。

5. 本報告書に収載した地形図は、建設省国土地理院発行の「毛馬内」「花輪」(1/25,000)を使用した。

6. 遺物などの実測・探査・トレス等の整理作業は調査員・調査補助員が行った。

7. 本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。

8. 本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。

9. 図版・表等で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

S B……掘立柱建物跡 S K……土壤 S X(S)……配石遺構 S X(F)……焼土遺構

■……遺構構築面以下の土層 □……焼土 □……赤色範囲

△……炭化物・風倒木痕の地山ブロック

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。

記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

河原純之、伊藤 稔(文化庁記念物課)、上山春平(京都国立博物館)、佐原 真、工
楽善通(奈良国立文化財研究所)、中野益男(帝広畜産大学)、斎藤 忠(大正大学)、
村越 澤(弘前大学)、阿部義平(国立歴史民俗博物館)、高橋与右エ門(岩手県埋蔵
文化財センター)、鈴木克彦(青森県立郷土館)、成田滋彦(青森県埋蔵文化財センタ
ー)、岩見誠夫、熊谷太郎、桜田 隆、小林 克、谷地 薫(秋田県埋蔵文化財センタ
ー)、奥山 潤

本文目次

巻頭写真

序

例言

本文目次

図版・PL・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

| | |
|-------------|---|
| 1. 遺跡の位置と立地 | 1 |
| 2. 周辺の道路 | 4 |
| 3. 遺跡周辺の地質 | 5 |
| 4. 発掘調査地の地質 | 6 |
| 5. 遺跡の層序 | 8 |

第Ⅱ章 調査の概要

| | |
|---------------|----|
| 1. 調査に至るまでの経過 | 12 |
| 2. 調査要項 | 13 |
| 3. 調査の方法 | 14 |
| 4. 調査の経過 | 14 |

第Ⅲ章 A区の検出遺構と出土遺物

| | |
|----------------|----|
| 1. 配石遺構とその出土遺物 | 16 |
| 2. 土壌とその出土遺物 | 30 |
| 3. 焼上遺構とその出土遺物 | 35 |
| 4. 風倒木痕 | 37 |
| 5. 遺構外出土遺物 | 40 |
| (1) 上器 | |
| (2) 石器 | |
| (3) 土製品・石製品 | |

第Ⅳ章 C区の検出遺構と出土遺物

| | |
|-------------|----|
| 1. 碑群 | 47 |
| 2. 遺構外出土遺物 | 51 |
| (1) 土器 | |
| (2) 石器 | |
| (3) 土製品・石製品 | |

第Ⅴ章 分析と考察

| | |
|-----------------|----|
| 1. 配石遺構群について | 78 |
| 2. 大湯環状列石周辺について | 86 |

第Ⅵ章 調査のまとめ

付

| | |
|--------------------------------------|-----|
| 1. 大湯環状列石周辺遺跡より出土した棒状木製品及び樹脂状凝固物について | 97 |
| 2. 大湯環状列石遺跡出土火山灰の螢光X線分析 | 100 |

写真図版

PL 目次

| | | |
|-------|--------------------------|-----|
| PL 1 | A 区配石遺構群域全景 | 102 |
| PL 2 | A 区配石遺構群域(1) | 103 |
| PL 3 | A 区配石遺構群域(2) | 104 |
| PL 4 | 第35号配石遺構 | 105 |
| PL 5 | 第36号配石遺構 | 106 |
| PL 6 | 第37号配石遺構 | 107 |
| PL 7 | 第39号配石遺構 | 108 |
| PL 8 | 第40、41号配石遺構 | 109 |
| PL 9 | 第41、42号配石遺構 | 110 |
| PL 10 | 第43号配石遺構 | 111 |
| PL 11 | 第44、45号配石遺構 | 112 |
| PL 12 | 第31、33、34、36号土壤 | 113 |
| PL 13 | 第35、37~39号土壤 | 114 |
| PL 14 | 第21~23号焼土遺構 | 115 |
| PL 15 | 第28、29号焼土遺構、 A 区基本層序 | 116 |
| PL 16 | A 区北西部、南東部 | 117 |
| PL 17 | C 区遺物出土状況 | 118 |
| PL 18 | C 区基本層序、C 区北東部 | 119 |
| PL 19 | C 区礫群、C 区全景 | 120 |
| PL 20 | A 区遺構内出土遺物 | 121 |
| PL 21 | A 区遺構外出土土器(1) | 122 |
| PL 22 | A 区遺構外出土土器(2) | 123 |
| PL 23 | A 区遺構外出土土器(3) | 124 |
| PL 24 | A 区遺構外出土土器、 土製品、石製品 | 125 |
| PL 25 | A 区遺構内、 C 区遺構外出土土器(1) | 126 |
| PL 26 | C 区遺構外出土土器(2) | 127 |
| PL 27 | C 区遺構外出土土器(3) | 128 |
| PL 28 | C 区遺構外出土土器(4) | 129 |
| PL 29 | C 区遺構外出土土器(5) | 130 |
| PL 30 | C 区遺構外出土土器(6) | 131 |
| PL 31 | C 区遺構外出土土器(7) | 132 |
| PL 32 | C 区遺構外出土土器(8) | 133 |
| PL 33 | C 区遺構外出土土器(9) | 134 |
| PL 34 | C 区遺構外出土土器(10) | 135 |
| PL 35 | C 区遺構外出土土器(11) | 136 |
| PL 36 | C 区遺構外出土土器(12) | 137 |
| PL 37 | C 区遺構外出土土器(1) | 138 |
| PL 38 | C 区遺構外出土土器(2) | 139 |
| PL 39 | C 区遺構外出土土器(3) | 140 |
| PL 40 | C 区遺構外出土土製品(1) | 141 |
| PL 41 | C 区遺構外出土土製品(2) 石製品 | 142 |
| PL 42 | 砾の研磨岩片 | 50 |

表目次

| | | |
|----|---------------|----|
| 表1 | 周辺の遺跡一覧表 | 3 |
| 表2 | 配石遺構觀察表 | 80 |
| 表3 | 各小塊を構成する配石形態表 | 83 |
| 表4 | 土壤觀察表 | 85 |

図版・P.L.・表目次

図版目次

| | | | |
|-------------------------|----|-----------------------|----|
| 第1図 大湯環状列石の位置と周辺の道路 | 1 | 第35図 C区遺構外出土土器実測図(2) | 57 |
| 第2図 調査区と周辺の地形 | 2 | 第36図 C区遺構外出土土器実測図(3) | 58 |
| 第3図 鹿角地方の配石遺構分布図 | 4 | 第37図 C区遺構外出土土器実測図(4) | 59 |
| 第4図 鹿角北部の地形分類図 | 6 | 第38図 C区遺構外出土土器拓影図(1) | 60 |
| 第5図 発掘調査区の地質柱状図 | 7 | 第39図 C区遺構外出土土器拓影図(2) | 61 |
| 第6図 A区基本層序 | 9 | 第40図 C区遺構外出土土器拓影図(3) | 62 |
| 第7図 C区基本層序 | 10 | 第41図 C区遺構外出土土器拓影図(4) | 63 |
| 第8図 A区配置図 | 17 | 第42図 C区遺構外出土土器拓影図(5) | 64 |
| 第9図 第35号配石遺構実測図 | 18 | 第43図 C区遺構外出土土器拓影図(6) | 65 |
| 第10図 第36号配石遺構実測図 | 19 | 第44図 C区遺構外出土土器拓影図(7) | 66 |
| 第11図 第37号配石遺構実測図(1) | 20 | 第45図 C区遺構外出土土器拓影図(8) | 67 |
| 第12図 第37号配石遺構実測図(2) | 21 | 第46図 C区遺構外出土土器拓影図(9) | 68 |
| 第13図 第39号配石遺構実測図 | 23 | 第47図 C区遺構外出土土器拓影図(10) | 69 |
| 第14図 第40号配石遺構実測図 | 24 | 第48図 C区遺構外出土石器実測図(1) | 71 |
| 第15図 第41号配石遺構実測図 | 26 | 第49図 C区遺構外出土石器実測図(2) | 72 |
| 第16図 第42号配石遺構実測図 | 27 | 第50図 C区遺構外出土石器実測図(3) | 73 |
| 第17図 第43号配石遺構実測図 | 28 | 第51図 C区遺構外出土土製品実測図(1) | 76 |
| 第18図 第44号配石遺構実測図 | 29 | 第52図 C区遺構外出土土製品実測図(2) | 77 |
| 第19図 第45号配石遺構実測図 | 30 | 第53図 C区遺構外出土石製品実測図 | 77 |
| 第20図 第31、33、34、36号上塗実測図 | 31 | 第54図 配石遺構形態分類図 | 78 |
| 第21図 第35、37~39号土壤実測図 | 33 | 第55図 配石下土壤長軸と底面積の相関図 | 79 |
| 第22図 第20~23号焼土遺構実測図 | 35 | 第56図 磁化にみる下部土壤の長軸方向 | 81 |
| 第23図 第25~29号焼土遺構実測図 | 36 | 第57図 求心性にみる下部土壤の長軸方向 | 81 |
| 第24図 第1、2号風倒木痕実測図 | 38 | 第58図 配石遺構群と小塊 | 83 |
| 第25図 A区遺構内出土土器実測図 | 38 | 第59図 土壌長軸と底面積の相関図 | 85 |
| 第26図 A区遺構内出土遺物拓影図 | 39 | 第60図 磁化にみる土壤の長軸方向 | 85 |
| 第27図 A区遺構外出土土器拓影図(1) | 42 | 第61図 求心性にみる土壤の長軸方向 | 85 |
| 第28図 A区遺構外出土土器拓影図(2) | 43 | 第62図 昭和21年調査地遺構配置図 | 88 |
| 第29図 A区遺構外出土土器拓影図(3) | 44 | 第63図 昭和27年調査地遺構配置図 | 89 |
| 第30図 A区遺構外出土土器実測図(1) | 45 | 第64図 大湯環状列石周辺遺構分布図 | 93 |
| 第31図 A区遺構外出土石器実測図(2) | 45 | | |
| 第32図 A区遺構外出土土製品・石製品 | 46 | | |
| 第33図 C区礫及び遺物分布図 | 48 | | |
| 第34図 C区遺構外出土土器実測図(1) | 56 | | |

付1

| | |
|--------------------|----|
| 図1 赤色顔料のX線回折図 | 97 |
| 図2 黒色樹脂の赤外吸収スペクトル | 98 |
| 図3 清法寺産漆の赤外吸収スペクトル | 99 |

付2

| | |
|--------------------------|-----|
| 図1 大湯環状列石跡出土火山灰のRb-Sr分布図 | 100 |
| 図2 大湯環状列石跡出土火山灰のK-Ca分布図 | 100 |
| 図3 浮石サンプル採取地点 | 101 |
| 図4 浮石サンプル採取地基本層序 | 101 |

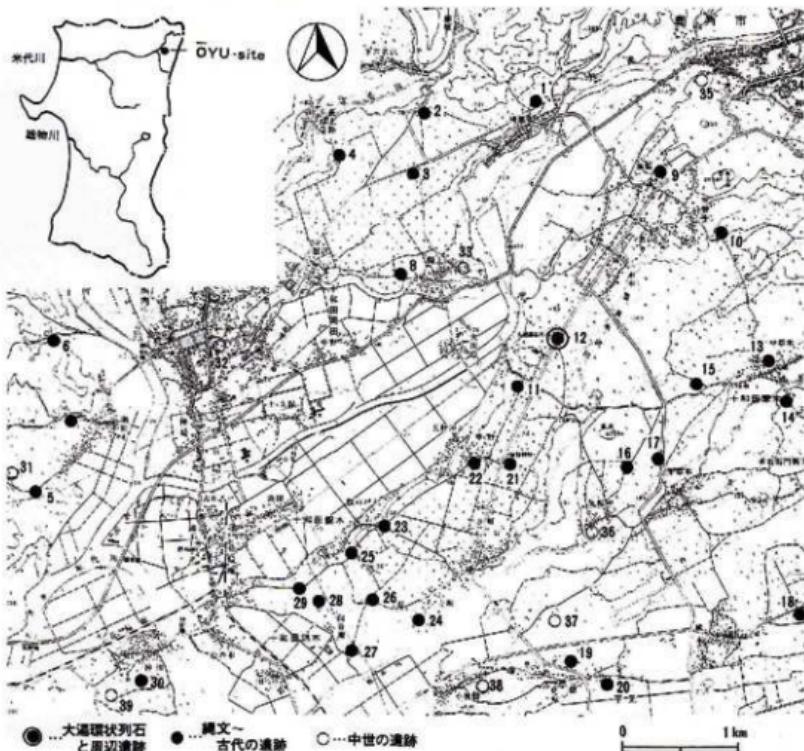
第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

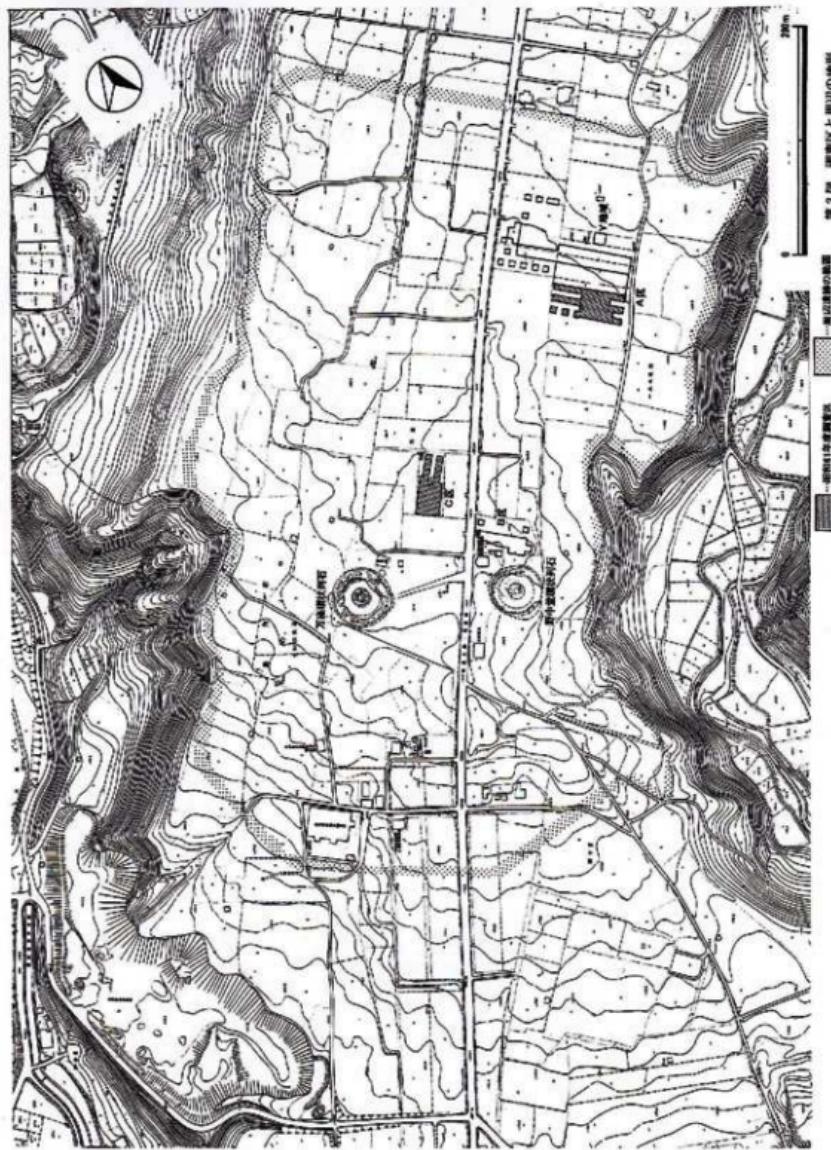
鹿角市は、奥羽山系の懷に形成された南北に細長い盆地である。鹿角盆地を一望すると、盆地東側に段丘地形が目につき、この段丘上には数多くの遺跡が分布する。国の特別史跡「大湯環状列石」および大湯環状列石周辺遺跡（大湯環状列石周辺に広がる大湯環状列石と直接または間接的に関連ある遺跡）もその一つである。

周辺遺跡のなる台地は、鹿角市の北東部に位置し、台地北側を流れる大湯川と南側を流れる豊真木沢川によってつくられた南西方向にゆるやかに延びた長さ 5.6 km、幅 0.5 ~ 1 km、標高 144 ~ 183 m の台地で、通称「風張台地」と呼ばれる。周辺遺跡はこの台地のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、国鉄花輪線卜和田南駅の北東 3 km の地点にある。

本年度の調査区は、便宜上 A 区、C 区と仮称した。



第1図 大湯環状列石の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区と周辺の地形

| No. | 遺跡名 | 所 在 地 | 遺構・遺物 | 備 考 |
|-----|-------------|----------------|--------------|---|
| 1 | 豊 沢 平 | 鹿角市十和田大湯字豊沢平 | 弥生土器 | |
| 2 | 下 砂 沢 | 山根字下砂沢 | 土師器 | |
| 3 | 中ノ平 I | 山根字中ノ平15 | 土師器 | |
| 4 | 土 手 ノ 上 Ⅲ | 山根字土手ノ上53 | 弥生土器、上鏡器 | |
| 5 | 外 ノ 沢 | 漸田石外ノ沢 | 縄文土器(前) | |
| 6 | 門 ノ 沢 A | 漸田石字門ノ沢1 | 縄文土器(後) | |
| 7 | 白 坂 | 漸田石字白坂 | 縄文土器(後) | |
| 8 | 松 木 | 大湯字松木3 | | |
| 9 | 下 夕 屢 布 | 大湯字下夕履布 | 弥生土器 | |
| 10 | 川 原 | 大湯字川原 | | |
| 11 | 野 中 平 Ⅲ | 錦木字野中平 | 縄文土器(後) | |
| 12 | 大 湯 環 状 列 石 | 大湯字野中堂・万座 | 環状列石・縄文土器(後) | 「大湯町環状列石」文化財保護委員会1953 |
| 13 | 草 木 | 草木字草木15-2 | 縄文土器(中) | |
| 14 | 保 田 IV | 草木字保田50-1 | | |
| 15 | 丸 館 表 | 草木字丸館表9 | 土師器 | |
| 16 | 丸 館 表 VI | 草木字丸館表35-2 | 縄文土器(後~晩) | |
| 17 | 草木A(草木小坂) | 草木字小坂 | 縄文土器(後~晩) | 「鹿角大湯原農道発掘調査略報」秋田県教委1975 |
| 18 | 芝 提 野 | 鹿角市花輪字元苔提野 | 住居跡、土師器 | 「大湯町環状列石」1953に収録 |
| 19 | 鳥 野 | 花輪字鳥野 | 住居跡1、土師器 | 「鳥野遺跡」秋田県教委1978 |
| 20 | 源 田 平 | 花輪字源田平 | 住居跡2、土師器 | 「鳥野遺跡」に収録 |
| 21 | 申 ケ 野 | 鹿角市十和田錦木字申ヶ野13 | 横石塚 | |
| 22 | 申 ケ 野 | 錦木字申ヶ野23 | 縄文土器(後) | |
| 23 | 植 有 平 I | 錦木字植有平116 | 土師器 | |
| 24 | 佐 花 | 鹿角市花輪字佐花 | | |
| 25 | 大 煙 II | 十和田錦木字大煙4 | | |
| 26 | 桔 草 坂 II | 錦木字桔草坂20 | 土師器 | |
| 27 | 桔 草 坂 古 墓 | 錦木字桔草坂 | 古墳、勾玉、土師器 | |
| 28 | 泉 森 I | 錦木字泉森6他 | 土師器 | |
| 29 | 物 見 坂 III | 錦木字物見坂5 | 土師器 | |
| 30 | 上ノ野 II ~ IX | 末広字上ノ野24他 | 縄文土器 | |
| 31 | 源 田 石 筵 | 源田石太郎左衛門 | | 「鹿角の篠3」鹿角市教委1984 |
| 32 | 毛 馬 峠 | 毛馬内字柏崎 | 桜庭兵助光英 | |
| 33 | 栗 神 館 | 大湯字間上 | 栗神安房 | |
| 34 | 大 湯 錦 | 大湯字和町 | 毛馬内直次他 | 「鹿角の館3」鹿角市教委1984 |
| 35 | 鹿 會 館 | 大湯字古館 | 大湯左衛門督他 | 同 上 |
| 36 | 丸 館 | 大湯字丸館 | 奈良越後 | |
| 37 | 一 ツ 森 館 | 花輪字一ツ森他 | | 「鹿角の館5」鹿角市教委1986 |
| 38 | 小 枝 指 館 | 花輪字平元古箭他 | 小枝指左馬之助 | 「経緯」東京大学東洋文化研究所1958 「鹿角の館1」鹿角市教委1982 |
| 39 | 春 石 館 | 十和田字神田沢 | 神田十郎 | |

第1表 周辺の遺跡一覧表

A区は、周辺遺跡範囲の東端、野中堂環状列石から250mの地点で、第1、2次調査において検出された配石遺構群の南西部分を明らかにするよう設定された区域である。配石群の検出された区域は、南側へ50mで台地縁に達し、豊真木沢川へ落ちる。北側には野中堂環状列石の南東の台地縁より伸びた沢状地形が入り込み、小さな舌状台地状の地形を呈する。

C区は、本年度新たに設定した区域で、野中堂環状列石の北方90m、万座環状列石の東方80mの地点で、県道大湯花輪線の北側に位置し、B区と県道を挟み対峙する。

A区、C区とも現況は、畠地として利用されている。

(藤井安正)

2. 周辺の遺跡

鹿角市は、県内でも屈指の遺跡の豊庫として知られており、現在440ヶ所以上が確認されている。これらの遺跡は、鹿角盆地を貫流する米代川の大小の支流によって作られた舌状台地の先端部や平坦地に分布し、概ね盆地東側に多い。第1図は、風張台地を中心として鹿角市遺跡地図より主な遺跡を抜き出したものである。なお周辺の遺跡については報告書(1)にその概略を記したので参照されたい。小項では、大湯環状列石および周辺遺跡と関連の深い、配石遺構の確認されている遺跡について主なものを概観していく。

鹿角地方において配石遺構の確認された遺跡は12ヶ所で、第2図に示した。

最も古いものとしては、中期末葉の天戸森遺跡がある。本遺跡からは住居跡140棟、土壙103基、配石遺構21基とともに多量の遺物が出土した。配石は舌状台地の北端の緩斜面(Ⅰ群)、居住区とⅠ群のほぼ中間に立地する微高地(Ⅱ群)、居住区中央の平坦地(Ⅲ群)に群をなして分布している。Ⅰ群は斜面に8基の配石が馬蹄形に配列され、いずれもその下部に土壙を有し、人為的に埋め戻されていること、また居住区と微高地により分離されていることから、配石は各々が配石墓と判断され、これらが集合し墓域を構成しているものと考えられた。さらにⅡ群は、その下部に土壙を有しているものが少ないと、墓域と居住区の境界に位置することから、祭祀的機能をもっていたものと考えられている。本遺跡にみられるように鹿角地方においては、中期末葉にはすでに墓域が成立していたことを示すものである。

後期の例としては、大湯環状列石、同周辺遺跡のはか、小坂町小坂環状列石、同大岱Ⅱ遺跡などがあり、検出例は多い。小坂環状列石は昭和33年安保彰氏により発見され、40年から4ヶ年にわたって小坂環状列石調査團により調査され、配石遺構5基が検出された。調査者の一人である奥山潤氏は、配石の片傍にピット(土壙)を伴うこと、ピット内には土器、石器など副葬品と思われる遺物があり、しかも土器は故意に割られたものが多いことから、墓壙としての性格を有していると述べている。また大岱Ⅱ遺跡は、小坂川を挟んで小坂環状列石と対峙する。東北縦貫自動車道建設に先立ち昭和57、58年に秋田県教育委員会により調査され、



第3図 鹿角地方の配石遺構分布図

後期前葉と考えられる土壙18基とともに配石群1ヶ所が検出された。配石群は南北に細長い尾

根部に分布し、配石 9 基から構成され、これらは概ね 3 群に分けられている。配石は 10~60cm 大の自然石を径が 1~2m の円形あるいは橢円形に配置したもので、9 基の配石中 5 基の配石下より長軸 1m 前後、深さ 36~57cm ほどの円形または橢円形の土壙が検出されている。これらについては積極的な根拠を欠くとしながらも墓壙（配石墓）と考えている。

晩期の例としては、昭和 43 年、阿部義平氏によって紹介された玉内環状列石がある。環状列石は台地先端部に 1 基のみが存在するもので、その形態は中央に石を立て、そのまわりに放射状に石を並べ、その外側に直径 2m の円形に縁石が置かれるもので、大湯環状列石にみられる「日時計」と呼ばれるものに類似する。この下に土壙があるかは未検討である。出土遺物には完形土器が 40 点余りあり、その他石棒の破片、石斧、滑車状耳飾りなどが出土している。土器には壺、皿、浅鉢、甕などがあり、その時期は晩期前半の大洞 B C 式のものである。

なお、第 2 図に示した遺跡については、各々の報告書にまとめられており、詳しくはそちらを参照されたい。

(藤井安正)

3. 遺跡周辺の地質

鹿角盆地は、東は奥羽脊梁山脈、西は高森山地に囲まれ、北に開いた三角形の盆地である。東西両縁は断層となっている。

脊梁山脈は 800~1100m の標高で、匹角岳 (1003m) 、皮投岳 (1122m) 、五ノ宮岳 (1115m) 等を中心とする急峻な壯年期の山地であり、地質は、第三系の下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、大滝層、遠部層などの堆積岩類、火山岩類より成る。高森山地は 400~500m の丘陵性の山地で、東側と同様、下位から大葛層、大滝層、遠部層、及び控内層の新第三紀中新世の堆積岩類、火山岩類から構成されている。

鹿角盆地は上記の山地に取り囲まれ、台地状に広がった地形が発達する。これは第三系を不整合に覆い、南部の八幡平火山噴出物、盆地全体には十和田火山噴出物、段丘堆積物及び沖積層が分布する。遺跡周辺では十和田火山噴出物、東部の脊梁山脈を源とする河川（根市川、草木川など）によって形成された扇状地状地形、台地を侵食した河川（根市川、豊真木沢川）によって作られた冲積低地が見られる。盆地内の段丘については報告書(2) (1986. 3) で 8 面に分類したが、ここでは調査区域で観察される鳥越面、普堤野面、毛馬内面、沖積低地について簡単に記載することにする。なお、台地上からは南東に標高約 207m の軍森や、北東方向に標高約 281m の黒又山の独立した丘陵が目につく。また対岸の北方には標高約 546m の黒森山を望むことができる。いずれも第三紀、遠部層の石英安山岩より成る。

鳥越面（地形分類図では間上段丘、鳥越段丘を含む）

大湯環状列石など多くの遺跡をのせ、盆地内に最も広く分布する。標高は南部で 150m 、北部は 280m に達する。構成層は十和田火山噴出物である高市 Pa 、鳥越 Pa (内藤 1966) を主体に

し、調査区域では、付近の砂利採石場の露頭から（後述）、上位に中ヶ野Pa、大湯軽石質火山礫層（いわゆる大湯浮石層）、黒色腐植土層から成ると見られる。

苔堤野面

後背育梁山地から供給された亜円～亜角礫層で構成され、草木、苔堤野など東部に特に発達する沖積扇状地である。最上部には大湯浮石層が見られる。

毛馬内面（地形分類図では毛馬内段丘）

大湯川流域に分布する低位の段丘面である。構成層は毛馬内Paであるが、この軽石流にさまざまな大きさ（数cm～数10cm）の礫層を伴うため、土石流傾向の強い堆積物と考えられる。大湯浮石層は各段丘面上に分布しており、毛馬内Paと同一火山活動に伴う噴出物であるが、降下堆積物の特徴を示す。（大池1974）

低位段丘堆積物（地形分類図では沖積層に含めた）

草木川、根市川、豊真木沢川沿いに分布している。鳥越面を開析した旧河床面上にできたもので、現河床との比高は2～4mあり、堆積物は数cm～20cm大の円礫、亜角礫より成ることが多いが、部分的には淘汰のよい砂層を挟む。中にラミナ構造が見られ、砂鉄が濃集している所が認められる。礫種は、輝石安山岩、石英安山岩、流紋岩、変質安山岩、凝灰岩類より成るほか、古生層起源の粘板岩やチャートが含まれている。

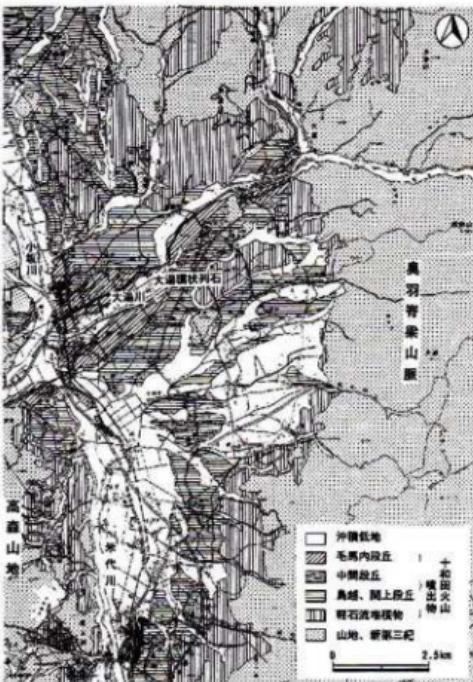
沖積低地（地形分類図では沖積層）

大湯川、米代川、支流の草木川、根市川、豊真木沢川などの現河床沿いの低地であり、主として砂礫から成る。

（鎌田健一）

4. 発掘調査地の地質

調査地は鳥越段丘面上にあり、その地質は周辺の崖の露頭及び砂利採石場で詳しく見ることができる。それによれば最下部は高市Paの二次堆積物であり、軽石や砂礫から成り、地層中に



第4図 鹿角北部の地形分類図

ラミナが発達する。採石場では下限は不明であるが、13mであった。この層の上に1~1.5mの暗緑色で帶状にのびた泥炭層を挟み、さらに厚さ2~3mの灰白色の鳥越Pa一次堆積物がある。境界付近には炭化した木片をたくさん挟む。この上には、水の作用によって、安山岩や凝灰岩などの数cm大の亜円礫を多数含んだ、ラミナの発達した軽石質二次堆積物が15~20m程堆積している。この層の上に風化のすんだ大形の軽石礫を含む黄褐色の中ヶ野Paが重なる。厚さは

1m前後である。最上部は黒色腐植土から成るが、腐植土中に数cm~30cmの層厚で夾在し、一見して地形面を覆うように堆積しており、全体に連続性もよい。北部ほど軽石の平均粒径、層厚ともに増加し、重鉱物組成でも角閃石を欠き、單斜輝石の少ないなどの特徴を示すことから、大湯浮石層である。次に各火山灰層の特徴を記載する。

高市軽石質火山灰層（高市Pa）

本調査区域最下位に見られる層である。分布は鹿角盆地全域に及び、下部から数cm大の軽石片を多量に含んだ灰白色無層理の火山碎屑物層、軽石まじりの乳白色火山灰層、砂質火山灰層の順に堆積し、さらに上部の円磨された数cm大の礫を含む火山灰質砂礫層、青灰色~暗緑色粘土層に移化する。風張台地では鳥越Paの下に水中淘汰を受けた二次堆積物が発達している。ここでも1~1.5mの厚さで粘土層があり、植生が見られる。産状から相当長期間に渡って湿地や沼地になったもので、一部は泥炭質になっている。

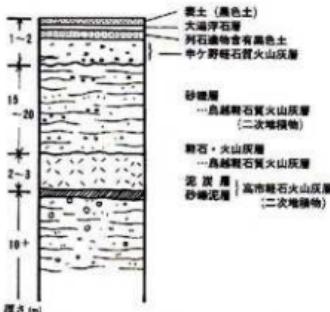
鳥越軽石質火山灰層（鳥越Pa）

本調査区域全体に広く分布する。対岸の関上面、鳥越面をはじめ、環状列石のある風張台地にも厚く堆積している。灰白~乳白色の無層理、塊状軽石質火山灰層で、軽石を多量に含む。粒径数cmのものが多いが、時には20~30cmに達するものも見られる。炭化した木片を不規則に含むだけでなく、粒径1~3cmの安山岩角礫も含む。本層の年代は12700±250yr. B.P.である。

一般にはこの上に水中堆積を示すラミナの発達した二次堆積物が見られる。構成物は安山岩の円礫~亜円礫が多いのが特徴である。鳥越Paは重鉱物組成上、角閃石を含み、單斜輝石がやや多い。

中ヶ野軽石質火山灰層（中ヶ野Pa）

調査区域では鳥越Paの上（下部の鳥越火山灰層をきざむ浸食面上）に重なっている。地表面に近いためか、全体的に黄褐色に見える。厚さは1~2mで、上部は黄褐色の軽石（数cm大）



第5図 発掘調査区の地質柱状図

を多く含み、下部は安山岩からなる砂質岩片の多い部分から成る。「遺跡の層序」中では地山、下位火山灰層と称している。斎藤・大池（1984）によれば、十和田湖、中ノ湖がつくられた第三期の活動で、瞰湖台軽石、南部軽石と一連のものである。重鉱物組成上、角閃石を含み大湯浮石層と区別される。

大湯軽石質火山礫層

いわゆる大湯浮石層であり、豆粒大～5cm大の黄褐色火山礫から成る層である。この層は鹿角全域で、当時の地形面上を覆うように堆積しており、連続性もよいなどから降下堆積物といえる。北部ほど粒径が大きく、層厚も大きくなる傾向が認められ十和田火山起源と考えられる。また地形的に凹地で厚く堆積しており、降下物の特徴を示している。堆積が地表に近いため局所的な耕作や削剥などの人工的な攪拌が進んでいる。堆積の状況から、降下時間は比較的短期間に行われたと見られるが、上位の黒色腐植土が形成されるまでに、かなりの時間経過があり、雨水などによる火山灰の消失や移動のため保存状況に大きな違いがある。本調査地でも、同じ地点で厚さ数cm～30cmと幅がある。重鉱物組成は角閃石を欠いて单斜輝石が少ない特徴を示す。

参考文献

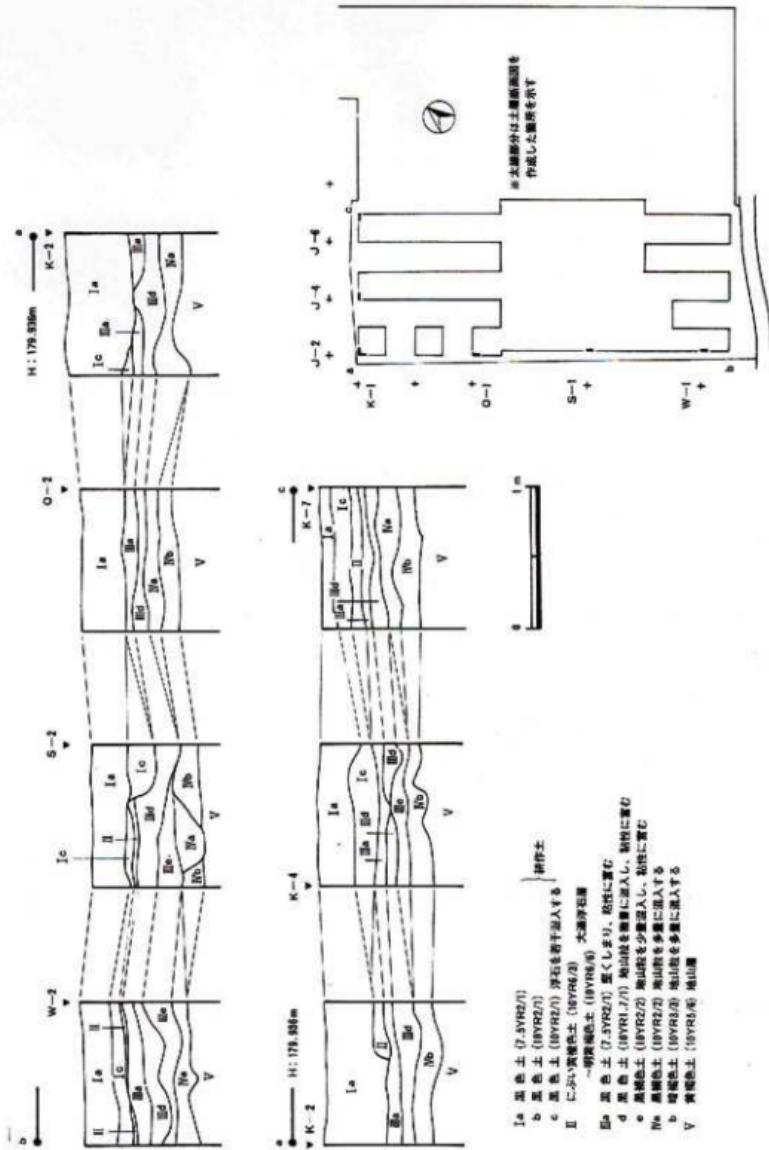
- 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」 地理学評論 第39巻第7号 1966年
内藤博夫 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」 地理学評論 第43巻第10号 1970年
中川久夫・他 「十和田火山発達史概略」 東北大地質古生物研究報 第73号 1972年
藤本幸雄 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1)」 昭和54年度大館工業高校研究紀要 1980年
斎藤仁子・大池昭二 「十和田新規火山の地質と岩石」 地球科学 第38巻第2号 1984年
秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書」 1981年
秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ」 1982年
秋田県 秋田県総合地質図幅「花輪」 1973年
秋田県 秋田県総合地質図幅「田山」 1983年
鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書1」 1985年
鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書2」 1986年

(鎌田健一)

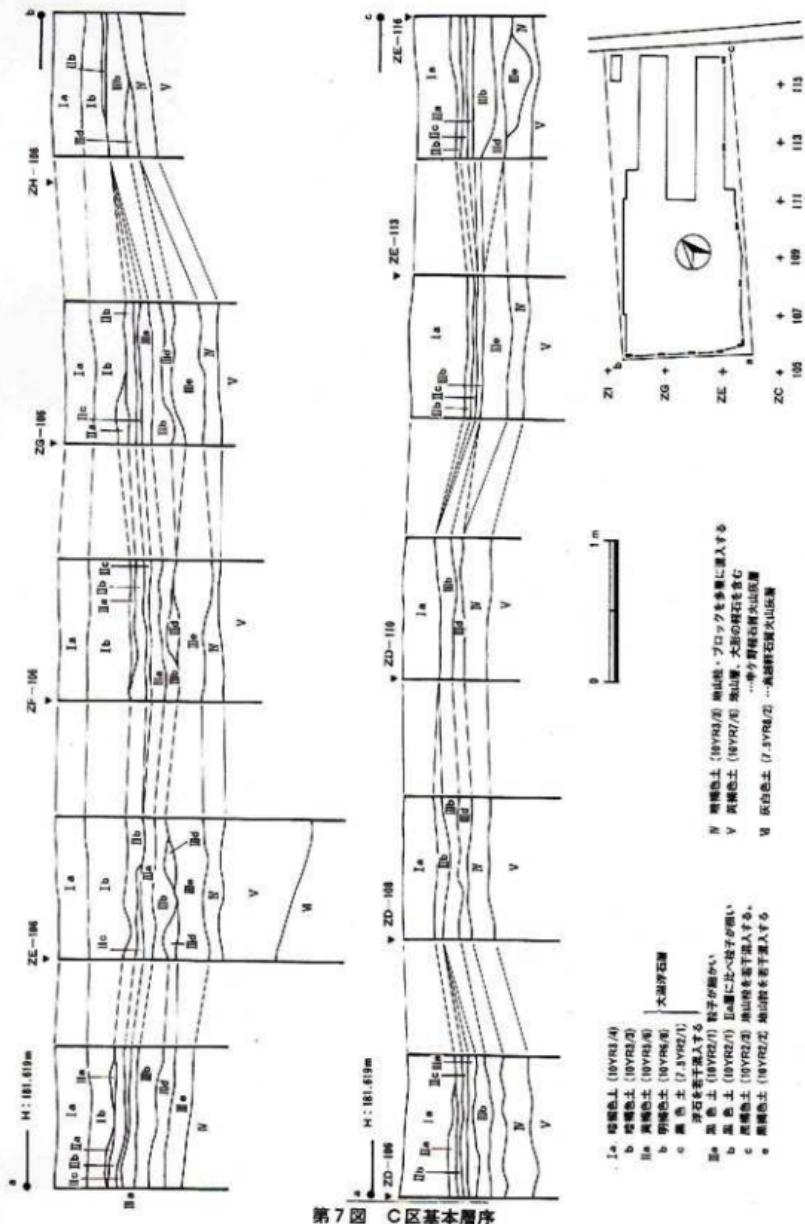
5. 遺跡の層序

ここでは表土から中ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層について記述する。それ以下については、4. 発掘地点の地質を参照にされたい。

今年度の2つの調査区（A区とC区）はかなりの距離を有しているため、基本的にはI～V層に分層したものの、各層の細分にあたっては別個のものとした。なお、A区については昭和59年度調査以来の分層基準と同一にし、C区については近接する昨年度の調査区（B区）の分層基準を参考とした。



第6図 A区基本層序



第7図 C区基本層序

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、A、C区とも2～3層に分層できる。いずれも耕作土である。

第Ⅱ層の大湯浮石層は、C区の中央部を除くほぼ全域とA区配石遺構群域以南及び北西部において観察された。特にC区南西端の105ラインでは10～14cmの層厚があり、粒子の粗細、色調、浮石の含有量から3層（Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc層）に細分された。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土層までの黒色または黒褐色を呈する土層である。A区配石遺構の配石は本層上位において露頭、その全容及び下部土壤は下位のⅢd～Ⅲe層において確認されている。

C区においては、本層は5層（Ⅲa～Ⅲe層）に細分される。Ⅲb～Ⅲd層が遺物包含層であり、多量の縄文時代後期前葉～中葉の遺物の出土があった。

第Ⅳ層は地山（下位火山灰）直上の層で、暗褐色を呈し、若干粘性がありしまりのある層である。

第Ⅴ層は先に述べたとおり、中ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色を呈する火山灰層である。A区の遺構はⅢ層下位を掘り込み面とし、Ⅳ層及び本層（一部にはⅤ層…鳥越軽石質火山灰層）を掘り込み、壁、底面としている。なお、本報告書では、本層をV層以外に下位火山灰、地山と表現している。

（秋元信夫）

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

大湯環状列石の発見から昭和31年の特別史跡指定に至るまでの経過については、大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)で詳しく述べているので、ここではそれ以降の経過について記する。

昭和40年代になると、遺跡の北東約500mに「鹿角大規模農道」の建設が計画され、南西約300mの地点で砂利採取事業が行なわれるなど、遺跡周辺の土木工事が多くなってきた。また、周辺農家の家屋改築が遺跡近辺へ広がる様子を見せ、農業の機械化やりんごの木の更新は、大湯環状列石周辺に存在が予想される関連遺跡の存続を脅かしつつあった。

このため、大湯環状列石と関連ある遺跡の範囲確認を目的に、秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会により、昭和48年には緊急分布調査、翌49年から51年には詳細分布調査が実施された。

これらの調査により、野中堂、万座の両環状列石の他に多数の配石遺構等の遺構が確認され、特別史跡大湯環状列石と直接あるいは間接的に関連ある遺跡（大湯環状列石周辺遺跡）の範囲は列石から北東約300m、南西約180mに及ぶことが判明した。

この結果を基に、昭和53年、鹿角市は（1）歴史広場としての公開による学術振興、（2）環境保護整備の具体化と実施、（3）施設の設置と教育作用の強化を柱とする「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を作成、以後この計画書を基本指針とし、主に指定地拡大の問題に取り組んできた。

さらに昭和59年からは、上記保存管理計画を具体化し、今後の実施計画の基礎資料を作成することを目的に周辺遺跡の発掘調査が開始された。

第1次調査（59年）は、昭和51年の分布調査においてその存在が確認されていた野中堂環状列石の北東300mの配石遺構群（A区）の解明を主目的に、さらに第2次調査ではA区調査の継続とともに、野中堂環状列石近傍の遺構の確認を目的に、同環状列石外縁より北東約20mの地点（B区）の調査が行われた。2カ年の調査により、A区においては配石遺構の性格、構築時期等が解明され、これらの配石遺構33基が幅20mの弧状帶上に位置し、さらに南西方向及び東方向に延びるものと考えられた。またB区においては、フラスコ状土壠等が検出され、これらの遺構が野中堂環状列石を意識した配置を呈していた。

このため、本年度はA区の配石遺構群域の遺構の配置の解明を目的に、さらにA区を南西方に拡張、調査を継続することとし、万座環状列石近傍の遺構の確認を目的に同環状列石の東方80mに新たに調査区を設定した。

（秋元信夫）

2. 調査要項

1. 遺跡名 大湯環状列石周辺遺跡

2. 調査地、発掘面積

| | | |
|----|----------------------|--------------------|
| A区 | 鹿角市十和田大湯字一本木後口 103 他 | 1222m ² |
| C区 | 鹿角市十和田大湯字万座81他 | 817m ² |

3. 調査期間

発掘調査 昭和61年5月8日～昭和61年9月8日

整理・報告書作成 昭和61年9月9日～昭和62年3月31日

4. 調査主体者 鹿角市教育委員会

5. 調査担当者 秋元信夫（鹿角市教育委員会 社会教育課）

6. 調査参加者

調査指導員 畠権泰時（秋田県教育庁文化課 学芸主事）

調査員 錢田健一（秋田県立十和田高等学校 教諭）

成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校 教諭）

三ヶ田俊明（小坂町立七瀧小学校 教諭）

藤井安正（鹿角市教育委員会埋蔵文化財調査員）

調査補助員 佐藤 樹、藤井富久子、浅石蘭子（昭和61年7月退職）

泉沢由美子、目時キミ子

作業員 木村千鶴江、木村ヒロ、工藤照佳、千葉ヨリ、苗代沢ノブ

苗代沢静子、宮沢キヨ、宮沢トミエ、柳沢勝江、柳沢栄子

柳沢恵美子、柳沢テル、柳沢ヤス

7. 社会教育課

課長 佐藤一彦 課長事務取扱（教育次長）池田克志

課長補佐 安田孝司

文化財係長 柳沢悦郎（庶務担当）

主事 秋元信夫（調査担当）

臨時職員 須田匡人（庶務）

8. 協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、

岩手県埋蔵文化財センター、奈良教育大学

木村義見、木村金栄（土地所有者）

（秋元信夫）

3. 調査の方法

59、60年度の第1、2次調査において、大湯環状列石周辺遺跡に所在する配石遺構群は、幅20mの弧状帶を呈し、さらに南西→北東方向に延びることが予想された。このため、本年度はその南西方向の範囲確認を目的に、60年度発掘区の南西隣接部を調査対象とし、3ヵ年の発掘区全域をA区とした。また、大湯環状列石（万座環状列石）近傍の遺構確認を目的に、万座環状列石外帯より東方向60～115mに調査区を設定、これをC区とした。

グリッドは第1次調査のものを延長した。すなわち、N-49°-Wを基準線とし、これに直交する線を設定し、調査対象地内に5×5mのグリッドを設定した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以ってそれぞれのグリッドを呼称した。C区のグリッドは、60年度調査のB区を延長、B区同様100番台の算用数字を用いた。尚各区間の距離は、B・A間（L-106～L-2間）は185m、C・B間（ZD-106～D-106間）は35mである。

表土からの除去作業は全て手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上面での遺構確認に努めた。遺構の番号は、第2次調査に引き継ぎて、遺構別に発見順に付した。なお、精査、分析後土壤から配石遺構への変更、除外した遺構が数点あり、調査時と本報告書の遺構番号には多少異同がある。

遺構の発掘に関しては、配石遺構では4分割法、土壤などについては2分割法を原則とした。遺物の取り上げは、遺構内及びC区遺構外のものは、1点ずつの図化・レベル実測後、A区遺構外のものは層位・グリッドごとの一括採集を原則とした。

遺構等の実測は簡易遺り方測量を用い、遺構実測図は1/10、基本層序図、C区縦断及び遺物分布図は1/20の縮尺で図化した。

写真撮影においては、35mm判小型カメラ（アサヒペンタックス・ニコンFE）2台を使用しモノクロ、リバーサル用に使い分けた。

（秋元信夫）

4. 調査の経過

大湯環状列石周辺遺跡の第3次発掘調査は、昭和61年5月8日から開始され、2039m²（A区1222m²、C区817m²）の調査を終了したのは9月8日であった。以下、調査日誌に基づき、調査経過の概要を述べる。

5月8日、作業員への作業説明、連絡事項伝達の後、A区の本年度調査区北西部より粗掘を開始する。この部分は、第1、2次の調査結果から遺構の存在の可能性が低かったため、幅5m、間隔5mの北西方向に延びるトレント方式の発掘とした。同月14日、予定された2本のトレントと3つのグリッドの粗掘を終了、若干の遺物の出土があったものの、遺構が確認されな

かったことから、A区北西部は拡張せず、A区中央部へと調査を移行する。

5月16、17日には、全体の調査計画を立てるため、A区の調査と併行し、C区の試掘調査を実施する。

5月26日からは、A区中央部において確認された配石造構、土壤の精査を開始する。同月29日にはA区中央部の粗掘をほぼ終了、南東部に設定した幅5mのトレンチの調査へと移行する。この時点で、A区において確認された造構数は、配石造構5基、土壤2基、焼土造構7基であった。

6月16日、A区の粗掘を終了、A区の造構確認、精査と併行して、C区の粗掘を開始する。C区の調査は、先の試掘調査において北東部はほとんど遺物の出土がなく、造構も検出されなかつたことから、111ライン以東は幅5mのトレンチ内ののみの調査とし、土捨場の関係からこの部分から調査を行なうこととした。

6月25日には、この北東部に設定した2本のトレンチ内の調査を終了し、C区南西端へと調査を移行する。

7月9日、A区の造構精査を全て終了する。A区において検出された造構は、配石造構10基、土壤8基、焼土造構14基であった。同月11日のA区の全景写真撮影後、配石造構の埋め戻し、復原を行い、16日に復原後の全景写真を撮影、A区の調査を終了する。

7月17日からはC区の調査に全力を注ぐ。C区の粗掘は中央部へと進み、南西部からは多量の礫及び遺物の出土があった。

8月8日にはC区のⅢ層までの粗掘を終了する。Ⅳ層上面までの面で造構は確認されず、さらにV層上面まで掘り下げるここととする。

8月26日、一部の礫群実測未終了部分を残してⅣ層の粗掘を終了、V層上面での造構確認に移る。長く雨が降らず、水をまきながらの作業となる。

8月30日、V層上面での造構確認を終了する。C区での造構は確認されなかった。基本層序図作成、地形測量、礫群石質調査等を残してほとんどの作業が終了したため、予定通り本日で作業員を打ち切り、担当者、調査員、補助員で残った作業を継続することとする。

9月8日、すべての調査、作業を終え、遺跡を後にした。

(秋元信夫)

第Ⅲ章 A区の検出遺構と出土遺物

第3次調査において、A区で検出された遺構は配石遺構、土壙、焼土遺構である。

配石遺構は、昭和51年分布調査X地域において確認されていたものを含め、計10基である。これらは第2次調査までに検出されていた配石遺構群の南西側に連続するように配置され、大きな弧を画いている。なお、51年度X地域は本年度調査区の中央Q～S—4～8グリッドに跨っている。同地域に位置する第36、37、39、40、42号配石遺構については、図面の上段に本年度の調査結果を、下段には51年時の確認状況を載せた。

配石遺構の他、土壙8基、焼土遺構14基を新たに検出した。これらは配石遺構群内とその近傍に位置している。

なお、51年に確認された1～3号遺構は、風倒木痕の黒色土部分を土壙として判断していたことが本年度調査で明らかとなった。

1. 配石遺構とその出土遺物

第35号配石遺構（第9図）

配石遺構群域の中央から南西側のQ—4、5グリッドに位置する。この付近に他の遺構は検出されなかった。昭和51年度分布調査X地域内にあって當時暗褐色土まで掘り下げているので、IV層上面において石の抜き取り痕と下部土壙の地山の大ブロックや粒子が混入した暗褐色土の落ち込みとを確認した。

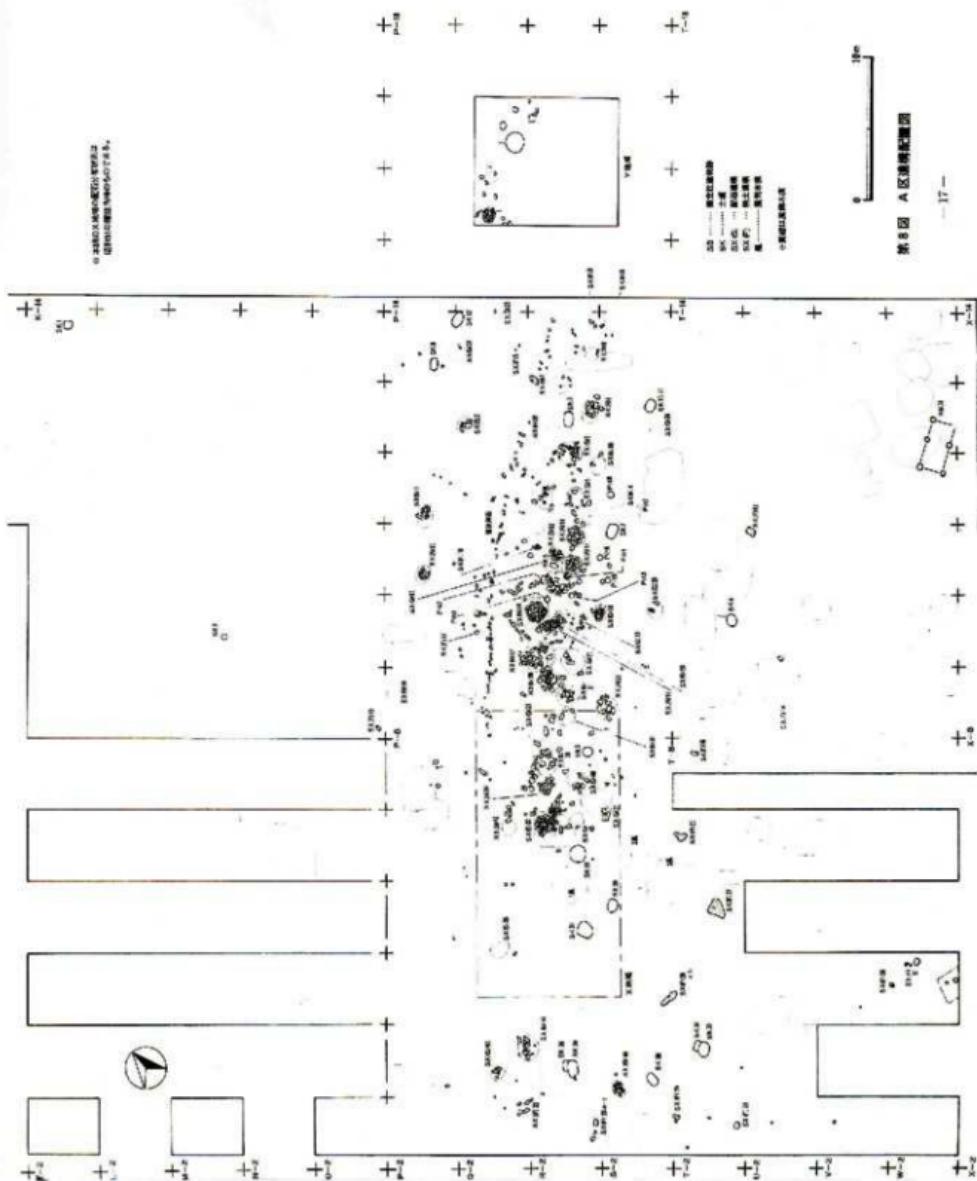
構築当時は下部に土壙を伴って配石を成していたと考えられるが、何らかの事由ですべての石を消失している。浮石粒が混入した石の抜き取り痕は11個検出され、それらは楕円形状に巡っている。その規模は長軸105cm、短軸73cmを測る。付近に本遺構から移動したと考えられる石は全く見当らず、51年に南東方向へ50cm程離れた地点にあった自然石も確認できなかった。抜き取り痕から推察すると、本遺構の配石は大型の石を立てて構成していたように考えられる。

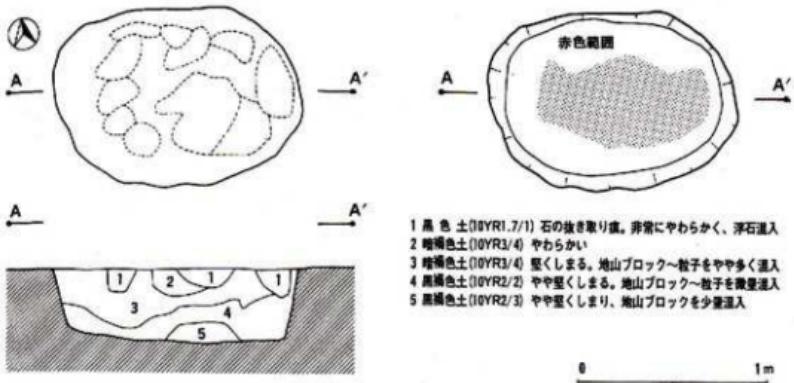
配石下より検出された土壙は、平面形は楕円形を呈する。長軸方向はW-Eを指し、規模は長軸127cm、短軸94cm、確認面からの深さ40cm、底面積0.77m²を測る。IV、V層を掘り込んでV層中位を底面とする。底面は堅くて小さな起伏があり、長軸線上に90×50cm程の赤色範囲を確認した。壁は底面からやや急な立ち上がりを呈する。堆積土は石の抜き取り痕を含めて7ブロックに区分され、人為堆積を呈する。

本遺構から遺物は出土しなかったが、周辺の遺物より本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

图 8 四 A 相连接图

— 17 —





第9図 第35号配石遺構実測図

第36号配石遺構（第10図、26図1、2）

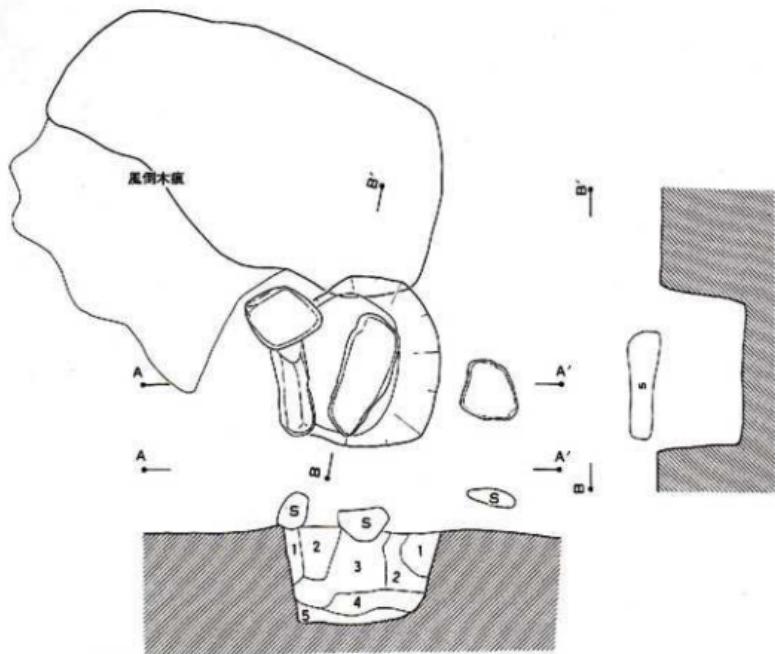
配石遺構群域の中央から南西寄りのR、S-6、7グリッドに位置する。本遺構の北側に40号配石遺構、北西側に45号配石遺構、西側に33号土壙が近接する。昭和51年度分布調査X地域内にあり、今回の調査ではIV層上面において配石の全貌と土壙のプランを確認した。

配石は51年時に3個の石を確認しており、X地域第3号遺構に隣接していた。今回の調査で本遺構の南東側に検出された石は、51年以降の移動によるものである。この他に周辺に本遺構との関係が考え得る石や石の抜き取り痕等は検出されていない。構築当時の状況は不明であるが、51年時の状況では、2個の柱状の石を並べて置き、西側の石の北端に平石を立て掛けているようだ。石の大きさは長さ34~65cm、幅20~28cm、厚さ15~23cm程度、この配石の規模は長軸80cm、短軸55cmを測る。

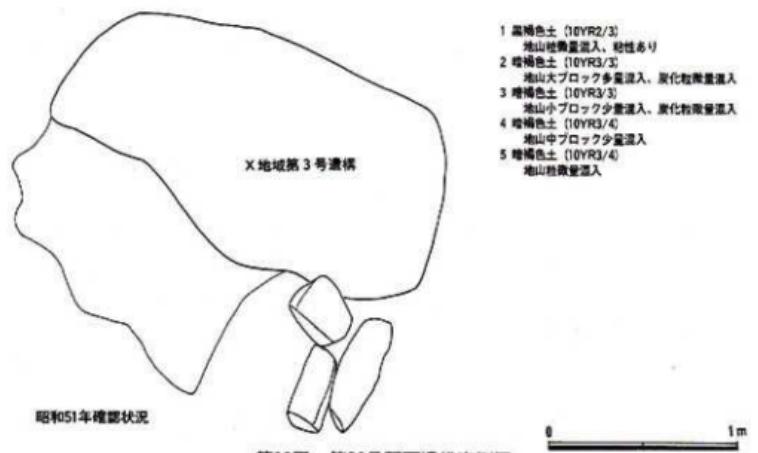
配石下に検出された土壙は北東壁の一部を51年第3号遺構によって消失しているが、上面はほぼ円形状と考えられ、底面は梢円形を呈する。規模は長軸約90cm、短軸83cm、確認面からの深さ50cmを測り、長軸方向はN-38°-Eを指す。IV層を掘り込んでV層中位を底面とする。底面積は約0.33m²で、赤色範囲は認められなかった。底面からの壁の立ち上がりは南東部は緩やかで、北西部は急である。底面及び壁の南西部は起伏が大きい。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積を呈する。

土壙内から4点の縄文土器破片が出土した。いずれも無文で、1は下位から、2は中位~下位から出土し、同一個体である。他の2点もこれらと同一個体と考えられる。

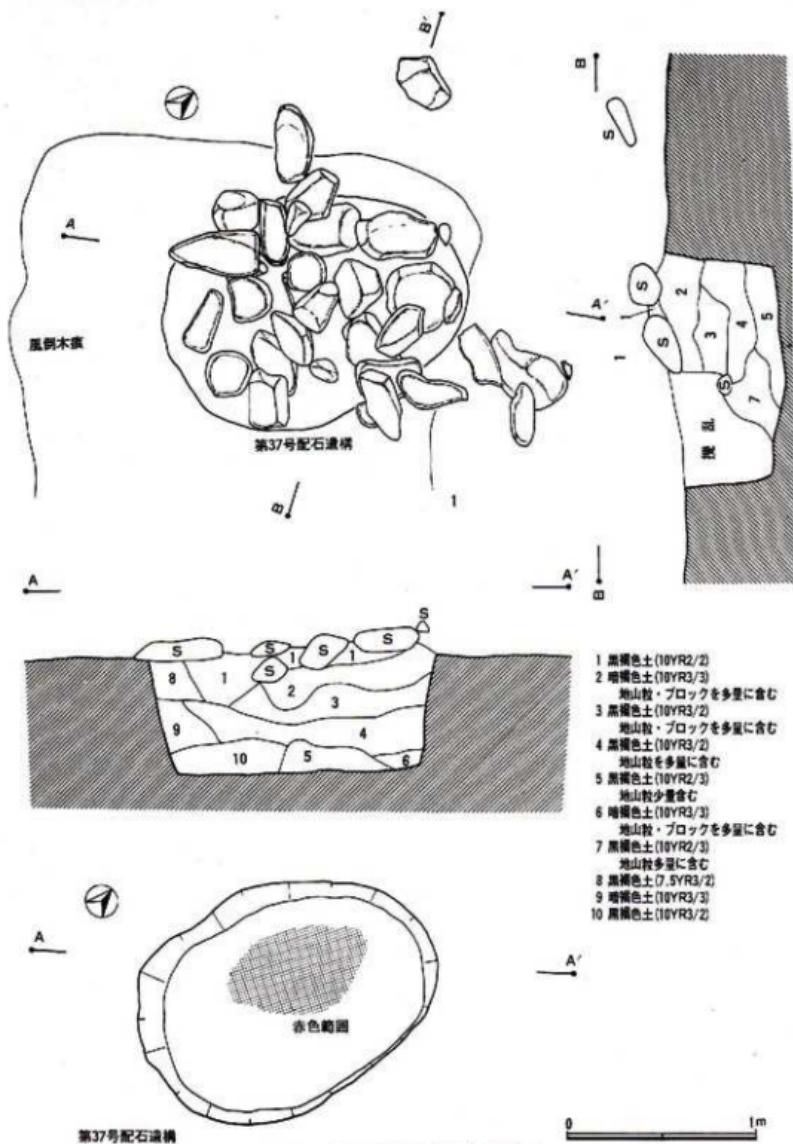
本遺構の構築時期は、遺構内及び周辺の遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。



第36号配石遺構



第10図 第36号配石遺構実測図



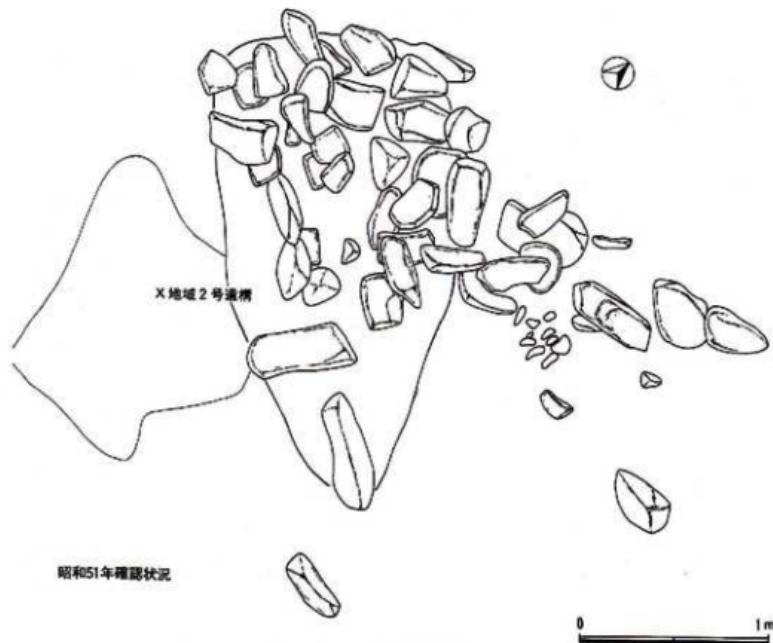
第11図 第37号配石造構実測図(1)

第37号配石遺構（第11図、12図）

配石遺構群域中央南西側のR—6 グリッドに位置し、IV層上面で全容を表した。本遺構北西側に42号配石遺構、北東側に39号配石遺構、東側に40号配石遺構、南東側に45号配石遺構、南側に33号土壙が隣接する。

本遺構は昭和51年度調査X地域の第2号遺構に相当する。遺構南西側は風倒木痕と重複している。風倒木痕は、黄褐色の地山土及び砂礫と黒色土より成り、51年度調査における第2号遺構はこの風倒木痕の黒色土部分を土壙としている。本遺構と風倒木痕の新旧関係は、本遺構が新しい。

配石は、15~48cmの大きさの様々な形の石を使用している。配石西側は、円形のまとまりを示すかのように石が配置されており、その規模は長軸170cm、短軸150cmを測る。また、東側に位置するものは、西側と比べると石のレベルが高く移動したものと考えられる。51年度調査では、「北西側の状況を見る限りでは周囲に石を立て、中に石を重ね置くというものである。」と報告されている。



第12図 第37号配石遺構実測図(2)

配石下土壙は、円形のまとまりを示す西側に存在し、長軸157cm、短軸117cm、深さ64cm、底面積1.18m²を測り、平面形は橢円形を呈する。長軸方向はN-27°-Eを指す。IV層を掘り込みV層下の砂礫層上位を底面としている。底面は小さな起伏があり、南側に若干傾斜しており、北側2/3は特に堅くしまっている。また、北西側に72×42cmの橢円形を呈する赤色範囲が認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は風倒木痕による砂礫より成る。堆積土は11ブロックに区分でき、全体的に地山粒、地山ブロックを多量含み、人為的な堆積状況を示す。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。

第39号配石遺構（第13図、26図3）

配石遺構群域の中央よりやや南西側、R-7グリッドに位置する。北東側に30号配石遺構が隣接する他、周辺に37、40号配石遺構が存在する。配石の全容はⅢ層下位で明らかとなった。本配石は、昭和51年度分布調査X地域の5号遺構に相当するもので、第13図下段と見比べてみるとかなりの石が移動していることが知られる。

配石の構造を復原していくと、中央に方形を呈する石を平石として置き、これを巡るように不規則な形状の石を立て、あるいは横位に立てたものと思われる。配石の規模は推定で長軸80cm、短軸75cmを測る。使用される石の大きさ、形状は様々で、中央の平石は30cm、配石縁辺部のものは25~56cmを測る。

配石下より検出された土壙は、配石と位置を一致する。平面形は橢円形を呈し、その規模は長軸88cm、短軸62cm、深さ41cm、底面積0.34m²を測る。長軸方向はN-55°-Eを指す。土壙はⅢ層下位から掘り込まれ、V層中位を底面とする。底面は、こまかな起伏がみられるが、平坦な感じを受け、堅くしまっている。赤色範囲は認められない。堆積土は、9ブロックに区分され、各ブロックともV層黄褐色土粒子、ブロックを含んでおり、人為堆積と判断された。

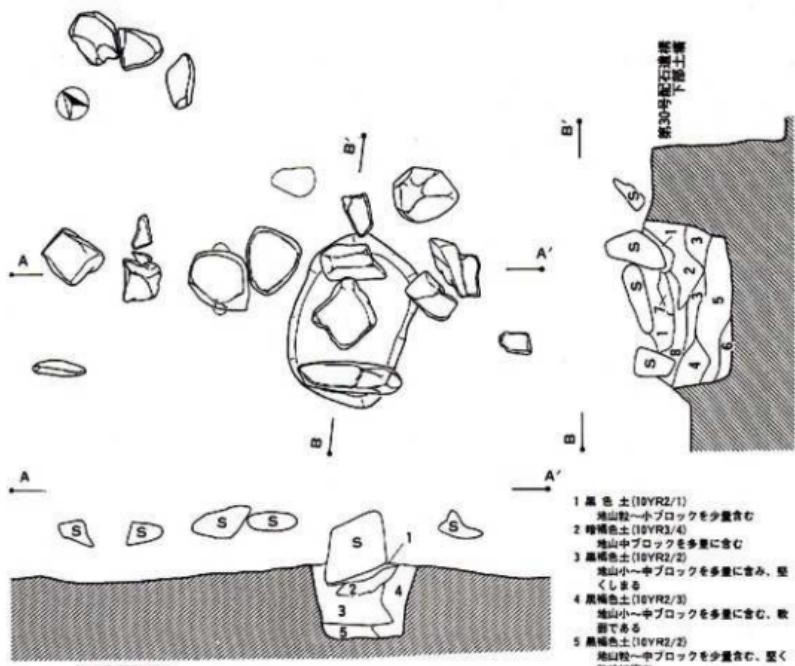
遺物は土壙上位より、磨消繩文が施された深鉢形土器破片が出土した。

本遺構の構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

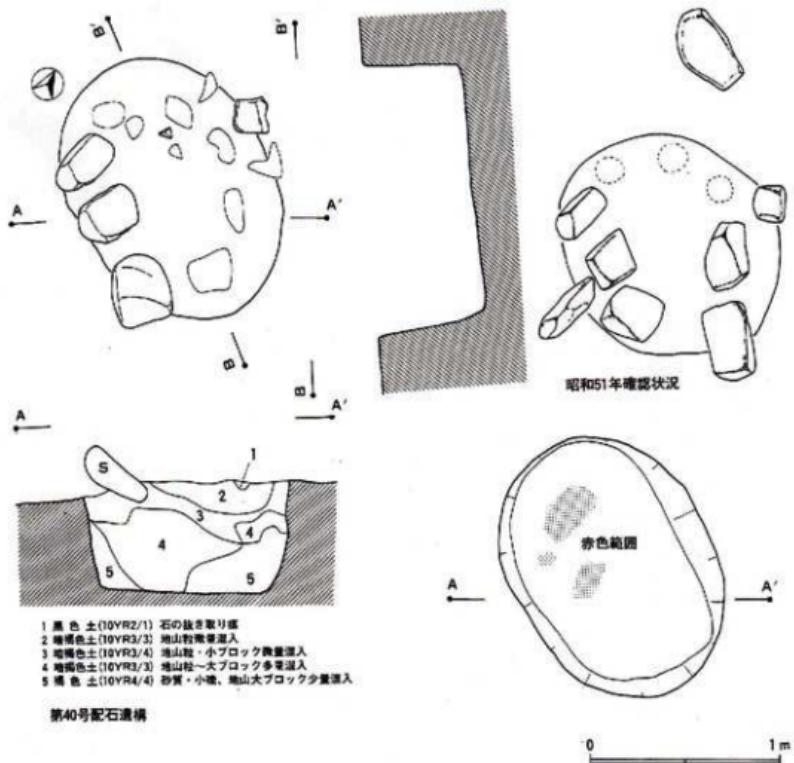
本遺構の北西側に円形に位置するものは、51年度X地域10号遺構に相当する。しかし、当時の記録写真によると石が少なからず移動した痕跡が見受けられる。また、この下部を調査したところ土壙の存在は認め得なかったので、配石遺構と判断できなかった。

第40号配石遺構（第14図、26図4~6）

配石遺構群域内、その中央からやや南西寄りのR-7グリッドに位置する。本遺構の東側に6号土壙、南側に36号配石遺構、南西側に45号配石遺構、西側に37号配石遺構、北西側に30、39号配石遺構が近接する。また本遺構は、昭和51年度分布調査X地域第4号遺構に相当し、当時配石と土壙が確認されており、土壙内は保存を目的に未掘であった。



第13図 第39号配石遺構実測図



第14図 第40号配石遺構実測図

本遺構の配石の全貌と土壤のプランはIV層上面において確認された。配石部は半壌しているが、南東部から南西部に検出された石は、土壤縁辺部に接するように立てられている。その部分に使用される石は、現存するものは長さ39~45cm、幅21~32cm、厚さ15~23cm程の柱状の石で、消失したものは同じ形状のさらに大型の石と推察される。東部には大型で角形の石が立てられている。周辺には本遺構から移動したと思われる石があり、石の抜き取り痕からも、この配石は大型の立石を橢円形状に一巡させた構造で、長軸160cm、短軸120cm程の規模と推定される。

配石下から橢円形を呈する土壤が検出された。規模は長軸143cm、短軸105cm、確認面からの深さ55cm、底面積0.93m²を測る。長軸方向はN-55°-Wを指す。IV、V層を握り込んで砂礫層上位を底面としている。底面はほぼ平坦で軟らかく、赤色範囲が確認された。西から35×19

cm、11×7 cm、25×13 cmを測り、他に中央から東寄りの地点にも確認した。北壁は底面から緩やかな立ち上がりを呈する。東部から南部の壁は堅くしまっていた。堆積土は石の抜き取り痕を含めて7ブロックに区分され、人為堆積を呈する。

土壤上位～中位から4点の縄文土器破片が出土した。4は磨消縄文の土器で、原体はL縄文が施文されている。5は無文、6はL R縄文が施文されている。

本遺構の構築時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉と考えられる。

第41号配石遺構（第15図、26図7～20）

配石遺構群域の南西端、Q、R～4グリッドに位置し、西側2 mの地点に43号配石遺構が隣接する。配石の全容はIIId層で明らかとなった。

配石は、大小様々な石から構築される。構造は、中央に柱状の石を立て、これを取り囲むように方形又は細長い扁平な石を平石として配置している。配石の規模は長軸175 cmを測る。使用される石は、中央立石は42 cm大のものを、他のものはコブシ大から49 cm大のものである。

配石下より検出された土壤は、配石と位置を一致する。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸179 cm、短軸146 cm、深さ67 cm、底面積1.50 m²を測る。長軸方向はN-24°-Eを指す。土壤はIIId層から掘り込み、V層下の砂礫層上位を底面としている。底面は、小さな起伏がみられ、堅くしまっている。底面はほぼ中央に104 cm×53 cmの赤色範囲が認められた。堆積土は、17ブロックに区分され、各ブロックともV層黄褐色土、砂礫を含んでいることから、人為堆積と判断された。

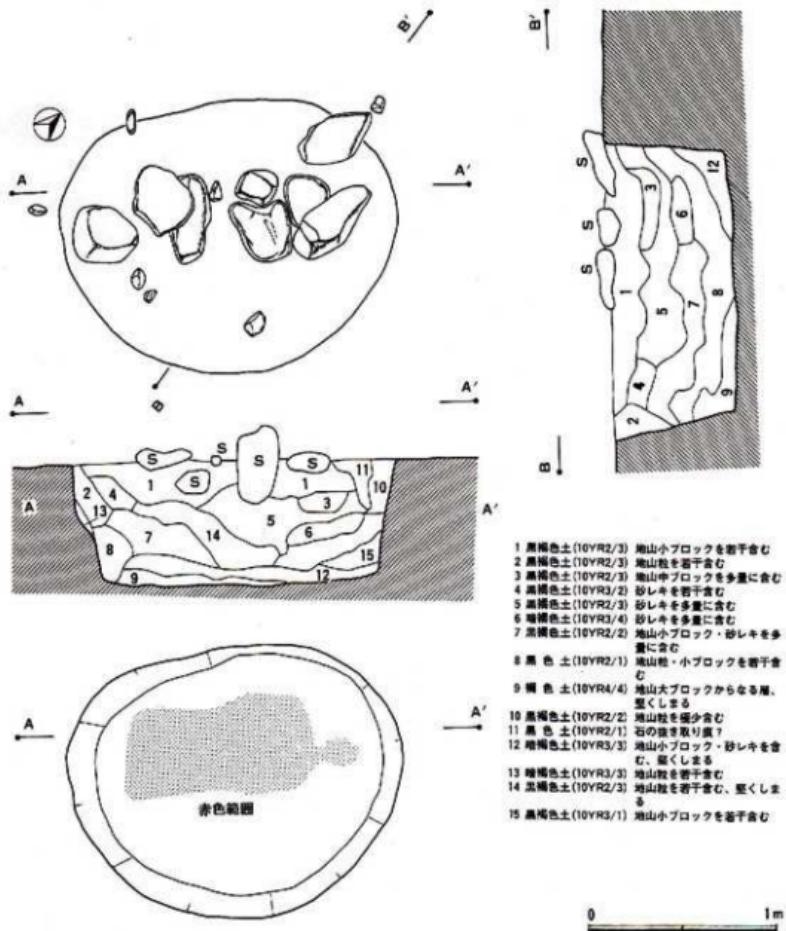
遺物は、土壤上位～中位より深鉢形土器破片が出土した。7～18は同一個体で、口縁部上端から網目状撚糸文が施文されるもので、L縄文が使用されている。19は同じく網目状撚糸文、20は連鎖状撚糸文が施文されるもので、いずれもR縄文が使用されている。

本遺構の構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第42号配石遺構（第16図）

配石遺構群域中央南西側のQ-6グリッドに位置し、IV層上面において、地山粒を含む黒褐色土の円形プランを確認した。本遺構南東側に37号配石遺構、東側に39号配石遺構が隣接する。

調査時には土壤上部及びその近傍に石ではなく、また石の抜き取り痕も確認されなかつたため土壤として扱った。第16図は昭和51年度調査における実測図をもとに作成したものである。この図から見ると、本遺構北東側に4個の石から成る51年度X地域の第9号遺構が存在し、土壤その他は認められていない。大岱II遺跡、平鹿遺跡等配石下部に土壤をもたないものや、小坂環状列石（杉沢環状列石）、黒森山遺跡等上部配石と下部土壤の位置が一致しない例がある。しかしながら本遺跡の場合、これまでの調査では全ての配石下に土壤を伴い、土壤と配石の位置が一致している。また51年時の写真を見ると実測図より若干南西寄りに見える事、実測図を南

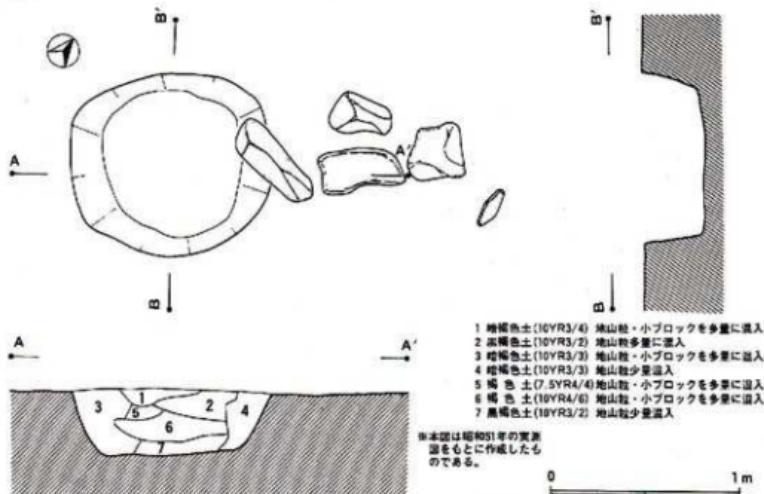


第15図 第41号配石造構実測図

西側に1mずらすとちょうど土壌上に配石が載る事などから、第9号造構は本造構の上部配石ではなかったかと考える事ができ、本造構を配石造構として扱った。

配石は、30~53cmの大きさの3個の石を並べ、中央の石の北西側に1個の石を並べ置くもので、その規模は長軸120cm、短軸50cmを測る。なお、このうち1つは立っていると報告されている。

土壤は、長軸106cm、短軸96cm、深さ33cm、底面積0.45m²を測り、平面形は円形を呈する。



第16図 第42号配石造構実測図

長軸方向はN-37°-Eを指す。IV層を掘り込みV層上位を底面としている。底面はほぼ平坦で堅くしまっており、赤色範囲は確認されなかった。壁はややゆるやかに立ち上がる。堆積土は7ブロックに区分でき、全体的に地山粒、地山ブロックが多量混入している。人為的な堆積状況を示す。

遺物は出土しなかった。

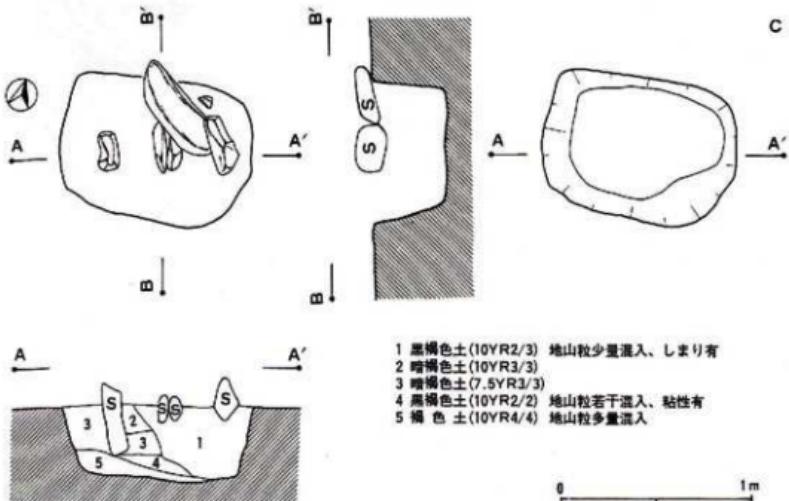
本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。

第43号配石造構（第17図、26図21、22）

配石造構群域南西側のR-2グリッドに位置し、IIId層下位においてその全容が明らかとなつた。本遺構の東側に41号配石造構、南側に22号焼土造構が隣接する。

配石は、20~58cmの大きさの5個の石が検出され、規模は長軸75cm、短軸60cmを測る。土壤長軸線上両端に2個の石を対峙させ、その中央に1対のやや扁平な石を立てている。これらの石の長軸はすべて土壤長軸と直交する。さらに東側には、中央と端の立石間に細長のやや扁平な石を置いている。

配石下土壤は、配石の位置と一致し、長軸103cm、短軸74cm、深さ38cm、底面積0.38m²を測る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向はN-74°-Eを指す。IIId層下位から掘り込みV層中位を底面としている。底面はやや起伏があり堅くしまっている。赤色範囲は確認できなかった。北壁はほぼ垂直に、他はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は6ブロックに区分でき、人為的な堆積を示す。



第17図 第43号配石遺構実測図

上層中位より3点の縄文土器破片が出土した。21、22は同一個体で、鉢形土器と考えられる胴部破片である。横位に長方形文、その下に2条の平行沈線による曲線文が施されている。これらの土器片には漆と思われるものが塗布されている。

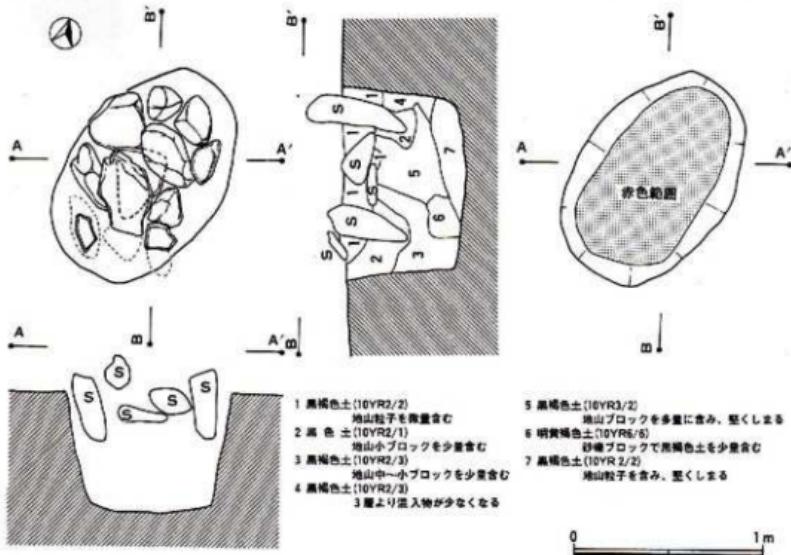
本遺構の構築時期は土壌内出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。

第44号配石遺構（第18図、25図、26図23～25）

配石遺構群域の南西側、S-3グリッドに位置する。配石はⅡ層下で石頭を現し、Ⅲd層でその全容が明らかとなった。北西側に34、36号土壌、東側に38号土壌が存在する。

配石は、縁辺部に7個の立石を楕円形に一巡させ、この内部に2個の平石を重ね置いた構造をもつ。その規模は長軸80cm、短軸75cmを測る。使用される石は、縁辺部立石が長さ37cm～53cmの柱状または幅のやや広いもので、これらの石がわずかに石頭を現す程度に埋設される。内部に置かれるものは、40cm大の扁平なものである。

配石下より検出された土壌は、配石と位置を一致する。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸118cm、短軸82cm、深さ66cm、底面積0.50m²を測る。長軸方向はN-15°-Eを指す。土壌はⅢd層から掘り込み、V層下の砂礫層上位を底面としている。底面はこまかに起伏がみられるが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。赤色範囲は底面全域に認められた。堆積土は、8ブロックに区分され、各ブロックともV層黄褐色土粒子～中型ブロックを含むことから、人為堆積と判断された。



第18図 第44号配石造構実測図

遺物は、配石部分より浅鉢形土器が出土した他、下部土壌上位から深鉢形土器破片が出土した。浅鉢形土器は、磨消縦文による入組状曲線文が横位に展開するもので、沈線間にL R 縦文が充填される。推定口径15cm、色調はにぶい黄橙色を呈する。23、24は同一個体で、網目状撚糸文、25は撚糸文が施されている。

本造構の構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第45号配石造構（第19図、26図26）

配石造構群域の中央よりやや南西寄りのR-6グリッドに位置する。造構確認面はIV層上面である。確認面が他のものより若干レベルが低いのは、この地点が昭和51年度分布調査X地域内であることに起因する。北西側に37号配石造構、南東側に36号配石造構が隣接する。

配石は、破壊されており、その形態は不明である。第19図は、51年および本年度に作成した図面をもとに作成したもので、辛うじて下部土壌縁辺に2個の細長の石が配置されていたことが看取されるだけである。この破壊が昭和51年以前の擾乱によるものなのか、または他の配石への石の転用によるものなのかは判断できなかった。

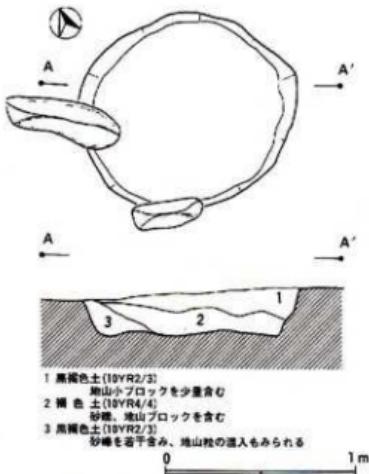
配石下より検出された土壌は、配石と位置を一致させるものと思われる。平面形は梢円形を呈し、その規模は長軸113cm、短軸102cm、深さ25cm、底面積0.76m²を測る。深さについては、造構確認面が他より低いことを考慮すれば推定で40cm程を測るものと思われる。長軸方向はN

—70°—Eを指す。土壤は、IV層と風倒木痕を掘り込んで、V層上位を底面とする。底面は、大きくゆるやかな起伏がみられ、堅くしまっていた。赤色範囲は認められなかった。堆積上は3ブロックに区分され、各ブロックにはV層黄褐色土粒子、小ブロックが含まれることから、人為堆積と判断された。

遺物は、土壤上面より無文土器破片1点が出土した。

本遺構の構築時期は、その周辺出土の遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(藤井安正、佐藤樹、藤井富久子)



第19図 第45号配石遺構実測図

2. 土壌とその出土遺物

第31号土壌 (第20図、26図27、28)

配石遺構群城南西側のR—5グリッドに位置し、IV層上面で確認した。本遺構東側に39号土壤が隣接する。

平面形は橜円形を呈し、規模は長軸118cm、短軸92cm、深さ23cm、底面積0.61m²を測る。長軸方向はN—7°—Wを指す。遺構北側は部分的に搅乱を受けている。IV層を掘り込みV層中位を底面としている。底面は小さな起伏があり堅くしまっている。赤色範囲は認められなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面はややもろい。堆積上は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

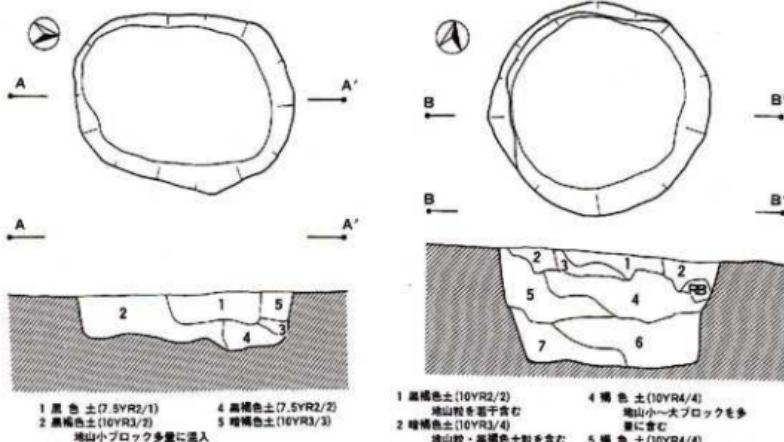
土壤中位～下位及び底面より3点の縄文土器破片が出土した。28は底面より、29は中位より出土したもので、いずれも磨消縄文の土器である。地文はともにL R縄文を施している。

本遺構の構築時期は、土壤内出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。

第33号土壌 (第20図)

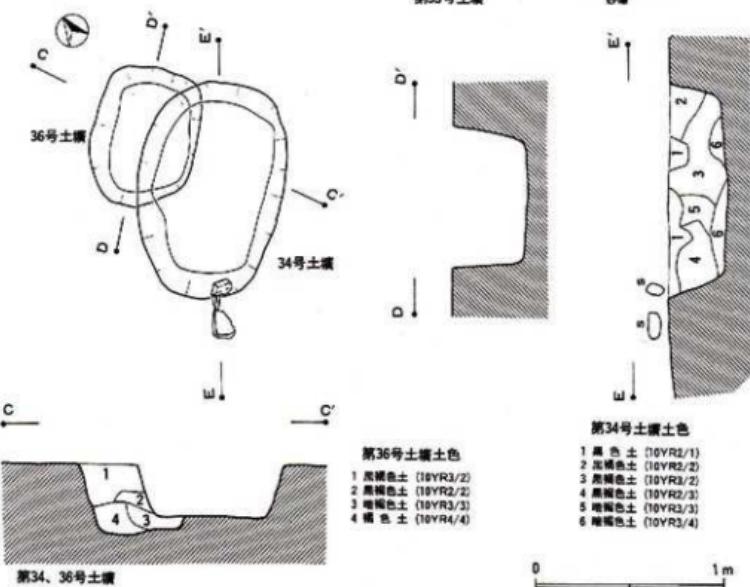
配石遺構群城の中央より南西側のR—6グリッドに位置する。遺構検出面はIV層上面である。検出面が他のものと比べて低いことは、昭和51年度X地域内に本遺構が存在するためである。本土壌北側に37号配石遺構、北東側に45号配石遺構が存在する。

土壤は、平面形が円形を呈し、その規模は長軸118cm、短軸112cm、深さ60cm、底面積0.65m²を測る。深さについては、検出面が他のものと比べて低いことから、推定で70cm程度と考えら



- 1 高褐色土 (10YR2/2)
地山粒を若干含む
2 増褐色土 (10YR3/4)
地山粒・黒褐色土粒を含む
3 棕色土 (10YR4/6)
地山粒を多く含む
4 棕色土 (10YR4/4)
地山小・大ブロックを多
量に含む
5 棕色土 (10YR4/4)
混入土は4層と同様、た
だし明瞭度が4層より薄
まる。
6 棕色土 (10YR4/4)
ローム粒・砂堆を多く含
む
7 黄褐色土 (10YR5/6)
谷堆

第33号土壤



第20図 第31、33、34、36号土壤実測図

れる。長軸方向はN-79°-Eを指す。土壤は、IV層から掘り込み、V層下の砂礫層まで達し、この上位を底面とする。底面はこまかに起伏がみられ、堅くしまっていた。赤色範囲は認められなかった。堆積土は、9ブロックに区分され、各ブロックとも黄褐色土、砂礫を多く含んでいることから、人為堆積と判断された。

遺物は、出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺出土の土器より、縄文時代後期前葉と考えられる。

第34号土壤（第20図）

配石遺構群域南西側のR-3グリッドに位置する。IIId層下位において黒褐色土の梢円形プランを確認した。36号土壤と重複し本遺構が新しい。また本遺構北側に41号配石遺構、南側に44号配石遺構、西側に22a、b号焼土遺構、南西側に23a～c号焼土遺構が隣接する。

平面形は梢円形を呈し、規模は長軸115cm、短軸77cm、深さ31cm、底面積0.45m²を測る。長軸方向はN-34°-Eを指す。IIId層下位から掘り込みV層上位を底面としている。底面、壁面とも小さな起伏がありややもろい。堆積土は8ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。南壁側付近に3個の自然石が存在するが、本遺構に伴うものではないと考えられる。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物より縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

第35号土壤（第21図、26図29～31）

配石遺構群域近傍のT-3グリッドに位置する。IIId層において黄褐色土粒子を微量に含む黒色土の落ち込みを検出した。なお本土壤は、北側部分で37号土壤と重複する。新旧関係は本土壤が新しい。

土壤は、平面形が梢円形を呈し、その規模は長軸109cm、短軸76cm、深さ37cm、底面積0.45m²を測る。長軸方向はN-56°-Eを指す。土壤はIIId層から掘り込み、V層上位を底面としている。底面は、ゆるやかな起伏を示し、やや軟弱である。赤色範囲は認められなかった。堆積土は、7ブロックに区分でき、人為堆積と判断された。

遺物は、土壤上位より縄文土器破片10点が出土した。30、31は深鉢形土器破片で、器面に条痕文が施されている。

本土壤の構築時期は、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

第36号土壤（第20図）

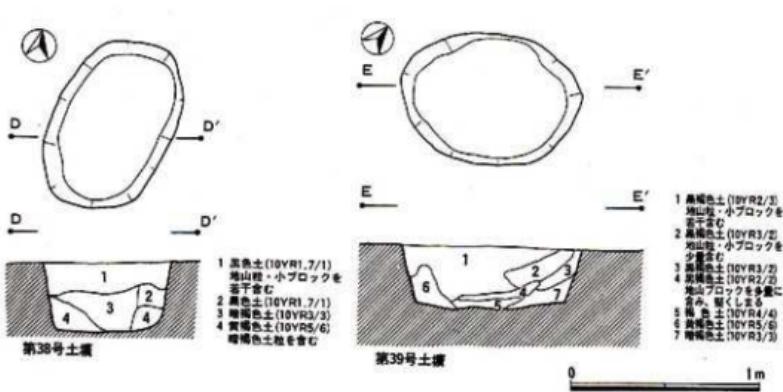
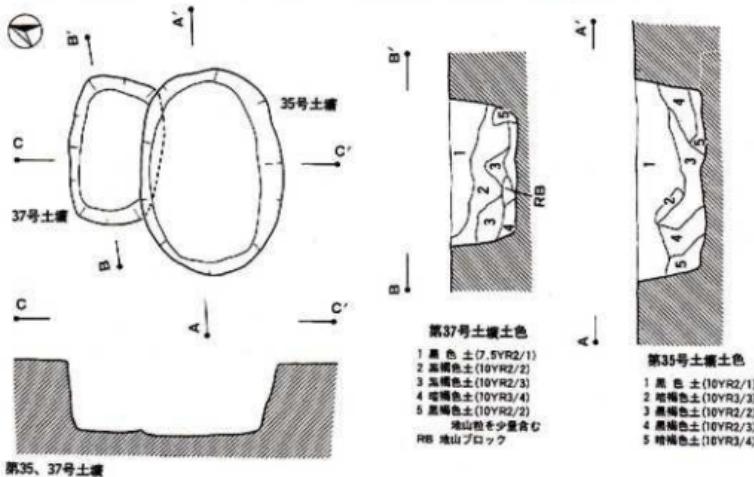
配石遺構群域南西側のR-3グリッドに位置し、IIId層下位で確認した。34号土壤と重複し、本遺構が古い。また本遺構北側に41号配石遺構、南側に44号配石遺構、西側に22a、b号焼土遺構、南西側に23a～c号焼土遺構が隣接する。

平面形は梢円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸55cm、深さ38cm、底面積0.21m²を測る。長軸

方向はN-36°-Eを指す。Ⅲd層下位から掘り込みV層上位を底面としている。赤色範囲は認められなかった。底面、壁面とも起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物より縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。



第21図 第35、37~39号土壤実測図

第37号土壙（第21図、26図32～34）

配石造構群域近傍のT—3グリッドに位置する。確認面は重複する35号土壙と同様にⅢd層である。しかし土壙と明確に判断し得たのは35号土壙調査中である。新旧関係は本土壙→35号土壙の順である。

土壙は、平面形が楕円形を呈し、その規模は長軸78cm、短軸55cm（推定）、深さ35cm、底面積0.21m²を測る。長軸方向はN—61°—Eを指す。Ⅲd層から掘り込み、V層上面を底面とする。底面は、こまかに起伏が多くみられるが堅くしまっている。赤色範囲は認められなかった。壁はやや外反して底面より立ち上がる。堆積土は8ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

遺物は、土壙上位より、条痕文の施文された深鉢形土器破片5点が出土した。

本造構の構築時期は、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

第38号土壙（第21図）

配石造構群域近傍のS—3グリッドに位置する。Ⅲd層において黄褐色土粒子を微量に含んだ黒色土の落ち込みを検出した。本土壙の北西側に44号配石造構が存在する。

土壙は、平面形が楕円形を呈し、その規模は長軸92cm、短軸64cm、深さ37cm、底面積0.34m²を測る。長軸方向はN—1°—Wを指す。土壙はⅢd層から掘り込み、V層上位を底面としている。底面は、こまかに起伏があり、堅くしまっていた。赤色範囲は認められなかった。壁は北西壁が底面よりやや外反するほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は、5ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

遺物は出土しなかった。このため本土壙の構築時期は判断しがたいが、周辺より出土した土器から、縄文時代後期初頭～中葉と考えられる。

第39号土壙（第21図、26図35、36）

配石造構群域の中央から南西寄り、S—5グリッドに位置する。本土壙の検出面はIV層上面である。西側2mの地点に31号土壙が存在する。

土壙は、平面形が楕円形を呈し、その規模は長軸96cm、短軸70cm、深さ34cm、底面積0.38m²を測る。長軸方向はN—46°—Eを指す。土壙はIV層から掘り込み、V層上位を底面とする。底面は、こまかに起伏があり、堅くしまる。赤色範囲は認められなかった。堆積土は7ブロックに区分され、各ブロックに黄褐色土が多量に含まれることから、人為堆積と判断された。

遺物は、土壙内より網目状撚糸文が施文された深鉢形土器破片が出土した。

本土壙の構築時期は、縄文時代後期初頭～中葉と考えられる。

（藤井安正、佐藤樹）

3. 焼土遺構とその出土遺物

第20号焼土遺構（第22図）

配石遺構群域近傍のT-6グリッドに位置し、Ⅲ層下位で確認した。76×64cmの焼土粒混入の暗褐色土範囲内に、規模10~20cm、厚さ3~4cmの焼土範囲が3ヵ所存在する。

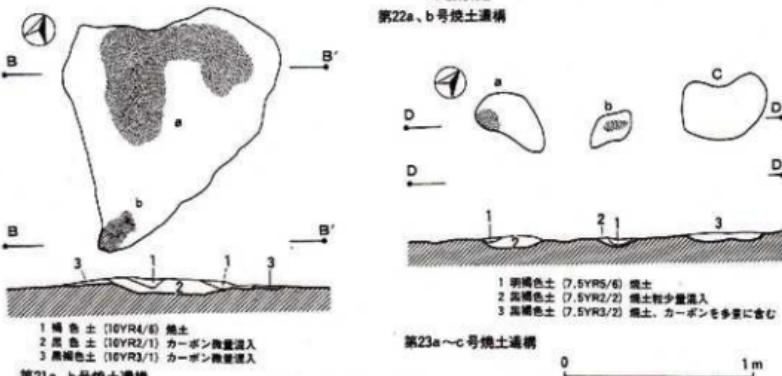
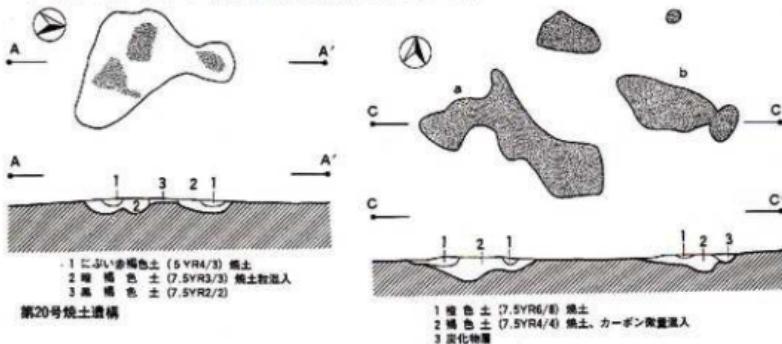
遺物は出土しなかった。

第21a、b号焼土遺構（第22図、26図37）

配石遺構群域近傍のT-5グリッドに位置する。Ⅲ層下位において不整形を呈する焼土とこれを取り囲む炭化物混入黒色土範囲を検出した。焼土は2ヵ所認められ、北側のものをa、南側のものをbとした。その規模は、a焼土が77cm×22cm、厚さ5cm、b焼土は25cm×12cm、厚さ3cmを測る。炭化物混入黒色土の規模は142cm×105cmを測る。

遺物は、a焼土2層内より、円盤状土製品が出土した。

本遺構の構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。



第22図 第20~23号焼土遺構実測図

第22a、b号焼土遺構（第22図）

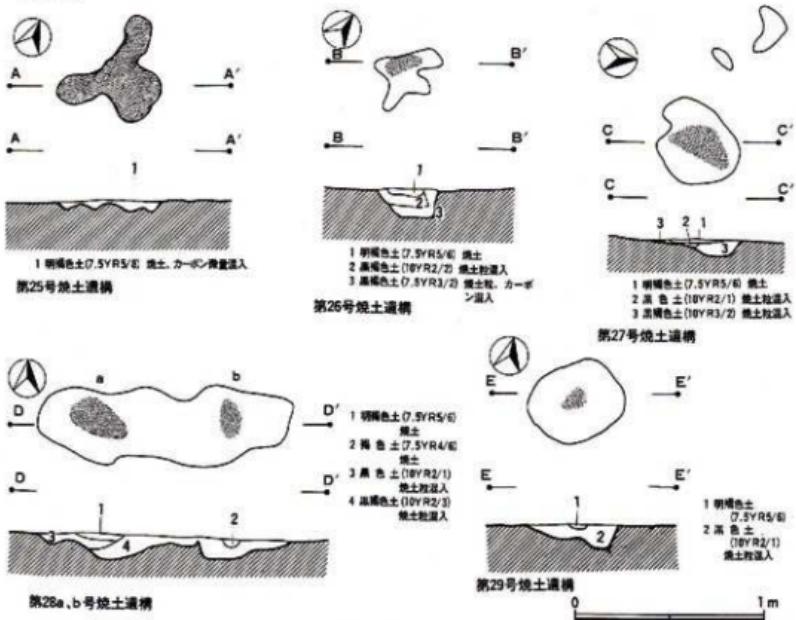
配石造構群域内南西端のQ-2グリッドに位置する。本遺構の北側に43号配石遺構、北東側に41号配石遺構が近接する。IIId層で上面を擾乱された本遺構を確認した。aは100×53cmの不整形を呈する焼土で、厚さは12cmを測る。bは67×26cmの範囲で焼土や炭化物を検出し、焼土の厚さは10cmを測る。これらの北西側には炭化物が散在していた。遺物は出土しなかった。

第23a～c号焼土遺構（第22図）

配石造構群域内南西端のR-2グリッド、IIId層において検出された。aは焼土粒が混入した黒褐色土が41×27cmの範囲にあり、焼土はその南側に偏在し、15×10cm、厚さ2cmを測る。bは25×16cmの範囲内のほぼ中央に、14×6cm、厚さ5cmの焼土が検出された。cは45×35cmの範囲に焼土粒が混入した黒褐色土が検出された。遺物は出土しなかった。

第25号焼土遺構（第23図）

配石造構群域近傍のS-T-3グリッドに位置し、本遺構の北側に38号土壙が近接する。IIId層において、56×54cmの不整形を呈する6cm程の厚さの焼土を確認した。遺物は出土しなかった。



第23図 第25～29号焼土遺構実測図

第26号焼土遺構（第23図）

配石遺構群域外W-5グリッドに位置し、本遺構の東側に27号焼土遺構が近接する。Ⅲ層中面で41×31cmの範囲に焼土粒や炭化粒が混入した黒褐色土を確認した。焼土は北西側に偏在し、19×10cm、4cmの厚さを測る。遺物は出土しなかった。

第27号焼土遺構（第23図）

配石遺構群域外W-5グリッドに位置し、本遺構の西側に26号焼土遺構が近接する。Ⅲ層中面において確認したが、上面は擾乱されていた。50×39cmの範囲に焼土粒が混入した黒褐色土があり、そのほぼ中央に35×18cm、厚さ2cmの焼土が検出された。遺物は出土しなかった。

第28a、b号焼土遺構（第23図、26図38）

配石遺構群域近傍のS、T-4グリッドに位置し、近接する他の遺構はない。Ⅲd層において、133×45cmの範囲に焼土粒が混入した黒褐色土を検出し、その長軸線上の2ヶ所に焼土を確認した。aは32×20cm、厚さ5cmを測り、bは21×10cm、厚さ5cmを測る。b焼土付近の焼土粒が混入した黒褐色土中より1点の繩文土器底部破片が出土した。

第29号焼土遺構（第23図）

配石遺構群域近傍のT-2グリッドに位置し、Ⅲd層において確認された。近接する他の遺構はない。50×40cmの規模の円形を呈する焼土粒が混入した黒褐色土の中央に、15×10cm、厚さ3cmの焼土が検出された。遺物は出土しなかった。

（藤井安正、佐藤樹、藤井富久子）

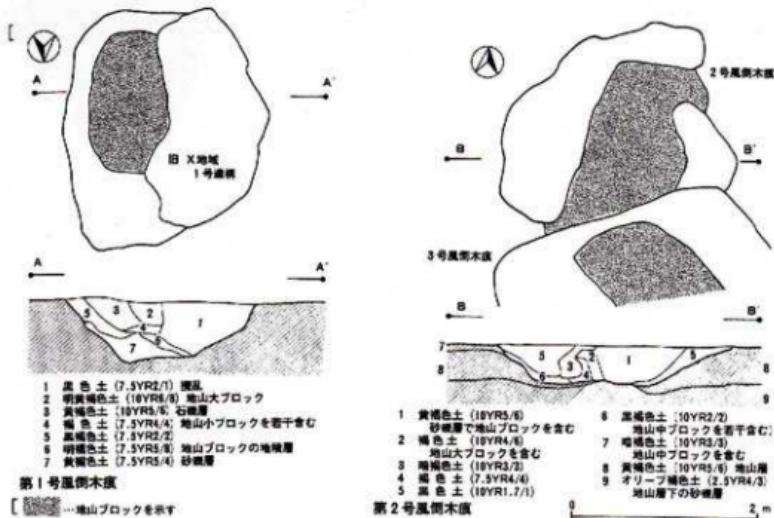
4. 風倒木痕

風倒木痕と思われる不整形を呈した落ち込みは、A区全域において認められた。しかしその多くは配石遺構群の内帶南東部、すなわち周辺遺跡の台地縁辺部に近づくにつれて増加する傾向を示している。一方配石遺構群域内に存在する風倒木痕は少數で、遺構と重複するものがある。これらの新旧関係は遺構が新しいものが多い。なお第1次～3次調査において確認された風倒木痕は30基余りあるが、その代表として第1号、2号風倒木痕について述べる。

第1号風倒木痕（第24図）

配石遺構群域の中央から南西寄りの、R-5、6グリッドに位置する。Ⅳ層上面で全容を検出した。この風倒木痕は、その位置と平面形態から、昭和51年度分布調査X地域第1号遺構に相当するものと思われる。

平面形は、中央に195cm×90cmの楕円形を呈する黄褐色土・明黄褐色土（地山土）が存在し、これを取り開むように30cm～110cmの幅で黒色土・黒褐色土が存在する。断面をみると落ち込みは凸レンズ状を呈し、堆積土上部に地山土や砂礫が浮き上がっており、この下位に黒色土が入り込んでいる。



第24図 第1、2号風倒木痕実測図

第2号風倒木痕（第24図）

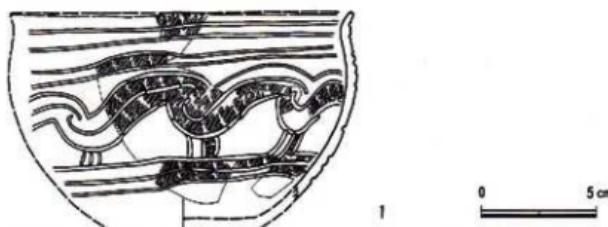
配石遺構群域の中央部より南西寄り、S—5、6グリッドに位置する。Ⅲ層において3号風倒木痕と重複する状態で検出した。

平面形は、中央に $110\text{ cm} \times 240\text{ cm}$ の梢円形を呈した黄褐色土（地山土）が存在し、これを取り囲むように幅40cm～90cmの黒色土又は黒褐色土が存在する。断面をみると、堆積土上位に地山土の大ブロックがあり、その下位に黒色土が入り込んでいる。

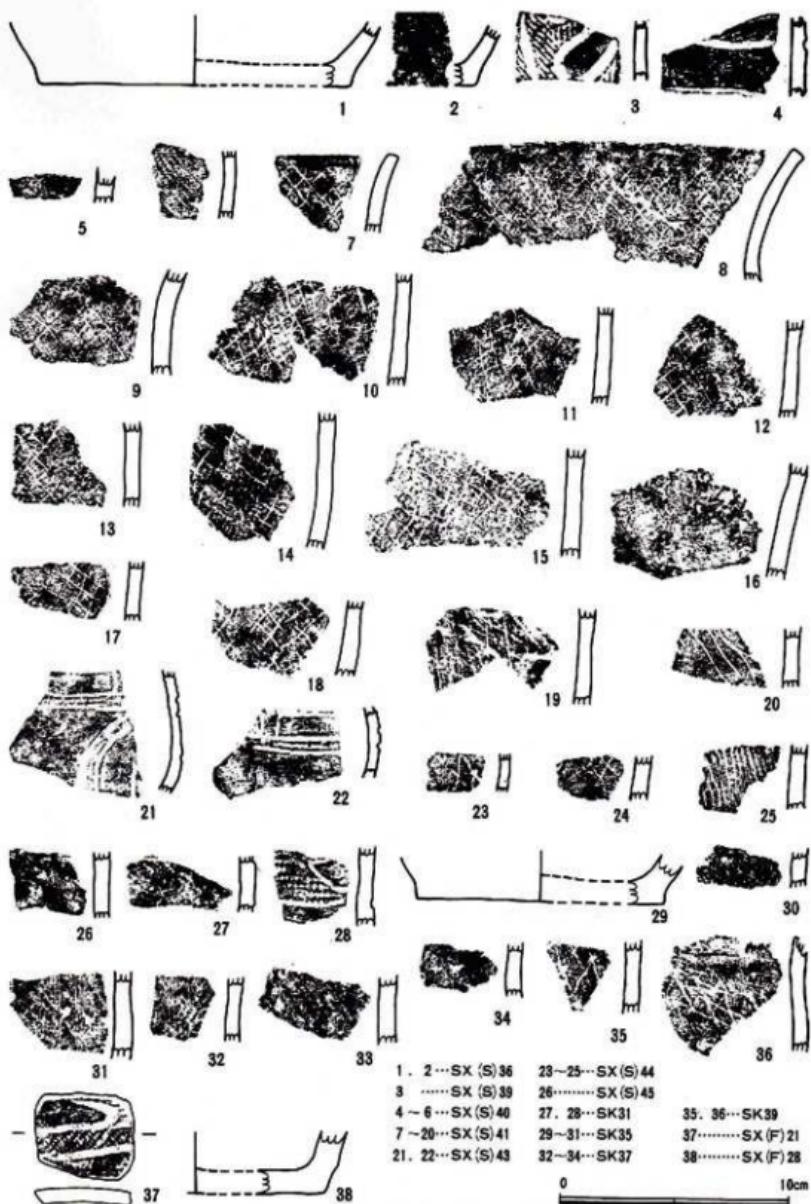
その他の風倒木痕

いずれもⅢ層が検出面である。平面形態は各々異なる形態を示すが、その断面形、落ち込みの堆積状況は、1、2号風倒木痕と類似する。いずれからも遺物は出土しなかった。

(藤井安正)



第25図 A区遺構内出土土器実測図



第26図 A区遺構内出土遺物拓影図

5. 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第27図~29図)

A区遺構外からは、828点（ダンボール箱1.5箱）の土器の出土があった。これらの土器は縄文時代後期に位置づけられるもので、その大半は前葉の土器である。配石遺構群域及びその周辺（O~T-2~7グリッド）からの出土がほとんどで、特にS-4~6、T-3グリッドの出土が多い。Q、R-4~6グリッドからの出土が少ないので、そのほとんどが昭和51年度の発掘区と重複していることによる。層位的には配石遺構確認面（Ⅲd層上位）から遺構構築面（Ⅲd層下位）にかけて集中している。

なお、A区配石遺構群域の全体写真撮影及び遺構再確認のため、第1、2次調査地の1部（P-T-8~13グリッド）を若干掘り下げ、90点余の土器の出土をみた。これらの資料も併せて報告する。

第I群 後期初頭~前葉の土器

1類 隆線文の土器 (第27図1)

本類は隆線及び沈線により文様が施された土器類で、S-8グリッド・IV層直上より1点（1）出土している。隆線上にはL R 縄文が施され、隆線の交わる部分には刺突が加えられている。また隆線下からは沈線文が延びている。焼成は良好で、にぼい橙色を呈する。

3類 沈線文を主体とする土器 (第27図2~14、28図46、48)

無文地に棒状工具により沈線文が施されている土器類で、直線的平行沈線文により文様を構成するもの、長方形文、曲線文が施されるもの等がある。また幾何学文の一部に連続刺突文が添うものもみられる。いずれも焼成は良好で、にぼい橙色、橙色、灰褐色等を呈する。Q~S-3、S-6、P-7~9グリッドのⅢd層下位より出土している。

4類 磨消繩文を主体とする土器 (第27図15~22、24~37)

充填、磨消技法による帶状文の施文されている土器類で、文様は2~3条の平行沈線により描かれている。口縁部には横位平行線文、長方形文、胴部には幾何学文、入組状曲線文、渦巻文等が施文されている。地文はL R 縄文が多く、L 縄文が次ぐ。焼成は良好で、色調はにぼい橙色を呈するものが多い。本類には深鉢、鉢、壺等の器種がみられ、深鉢には折り返し口縁のものもみられる。

第II群 後期中葉の土器

2類 幅の広い磨消繩文の土器 (第28図38~45)

沈線による曲線文内に繩文が充填された土器類で、細繩文が多用される。地文にはL R 、R L 、L 縄文が使用されている。焼成は良好で、色調はにぼい橙色、浅黄橙色を呈する。O、P-4、S-6、P、Q-11グリッドⅢd層より出土している。

第三群 後期後葉～末葉の土器

1類 入組帯状文の土器（第27図23）

入組帯状文の施文された土器類で、深鉢の胴部片1点（23）が本類に該当する。地文はL R 縄文、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。P-2グリッド・IIId層の出土である。

2類 貼瘤を有する土器（第28図50）

縁付土器は、Q-3グリッド・IIId層より1点（50）の出土があった。深鉢口縁部片で、口縁部上方に1対の貼瘤と横位沈線文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

第四群 後期の土器

本群には、条痕文、撚糸文、縄文、無文の土器を一括した。

1類 条痕文の土器（第29図57～62）

縱位方向の条痕文の施文されている土器類で、6点とも深鉢胴部片である。ほとんどがT-3グリッド・IIId層からの出土である。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色のものが多い。

2類 撥糸文の土器（第29図63～80）

縱～斜方向の撚糸文、漬錦状部分を有する撚糸文（69、71、72）、網目状撚糸文（73～80）等が施文された土器類で、ほとんどが平口縁の深鉢と考えられる。折り返し口縁のもの（73、74）、口縁部が無文となるもの、口頭部に横位沈線文が施文されるものもある。軸に巻かれる条にはR縄文が多用され、L縄文がそれに次ぐ。焼成は良好で、にぶい黄橙色、にぶい橙色、にぶい赤褐色等を呈する。N、P-6グリッド・IIId層からの出土が多い。

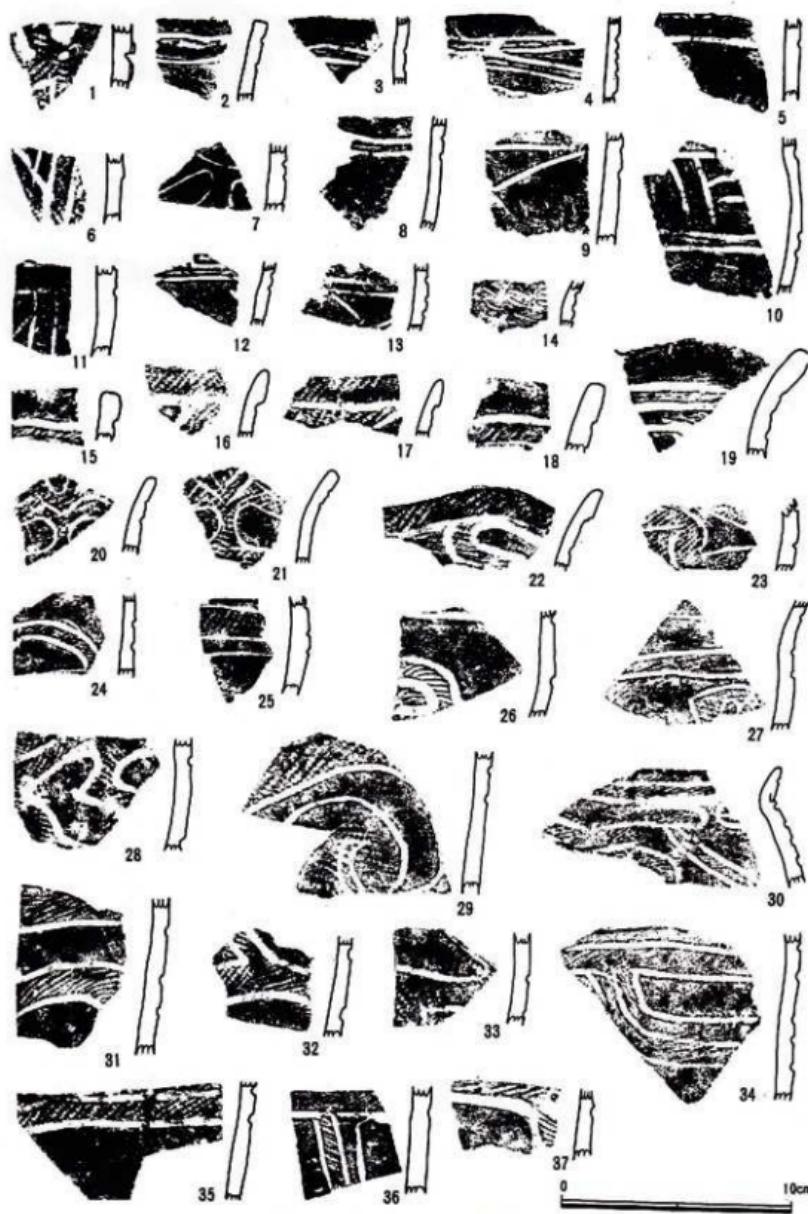
3類 縄文の土器（第29図81～86）

本類の土器には、刷部上端の撚糸压痕文や横位沈線文により口縁部無文帯と胴部縄文部分を画しているもの、II縁部が無文のもの（84）、II縁部に無文帯を有しないもの（82、85、86）、口唇部にも縄文を施文するもの（81）等がある。L R 縄文が多用され、L縄文がそれに次ぐ。いずれも平口縁で、II縁部が外反する深鉢である。焼成はやや良好、色調はにぶい橙色、淡黄橙色、淡橙色等を呈する。

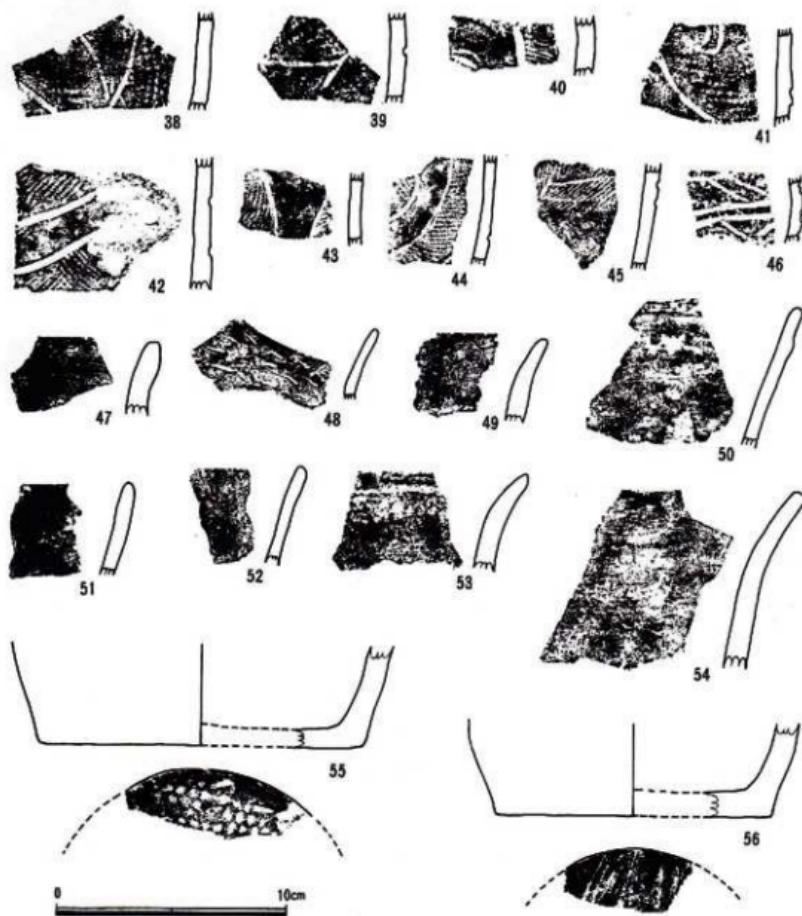
4類 無文の土器（第28図47、49、51～54）

本類には、深鉢、鉢、壺等があり、比較的小型のものが多い。他類の口縁部や底部付近の土器片を混入している可能性もあるが、3類の縄文のみ施文された土器類に次いで多い。53のように口縁部に撚糸压痕文を有するものは、3類の可能性がある。焼成は良好なものが多く、色調は浅黄橙色、にぶい黄橙色、にぶい橙色、にぶい褐色等を呈する。

(秋元信夫)



第27図 A区遺構外出土土器拓影図(1)



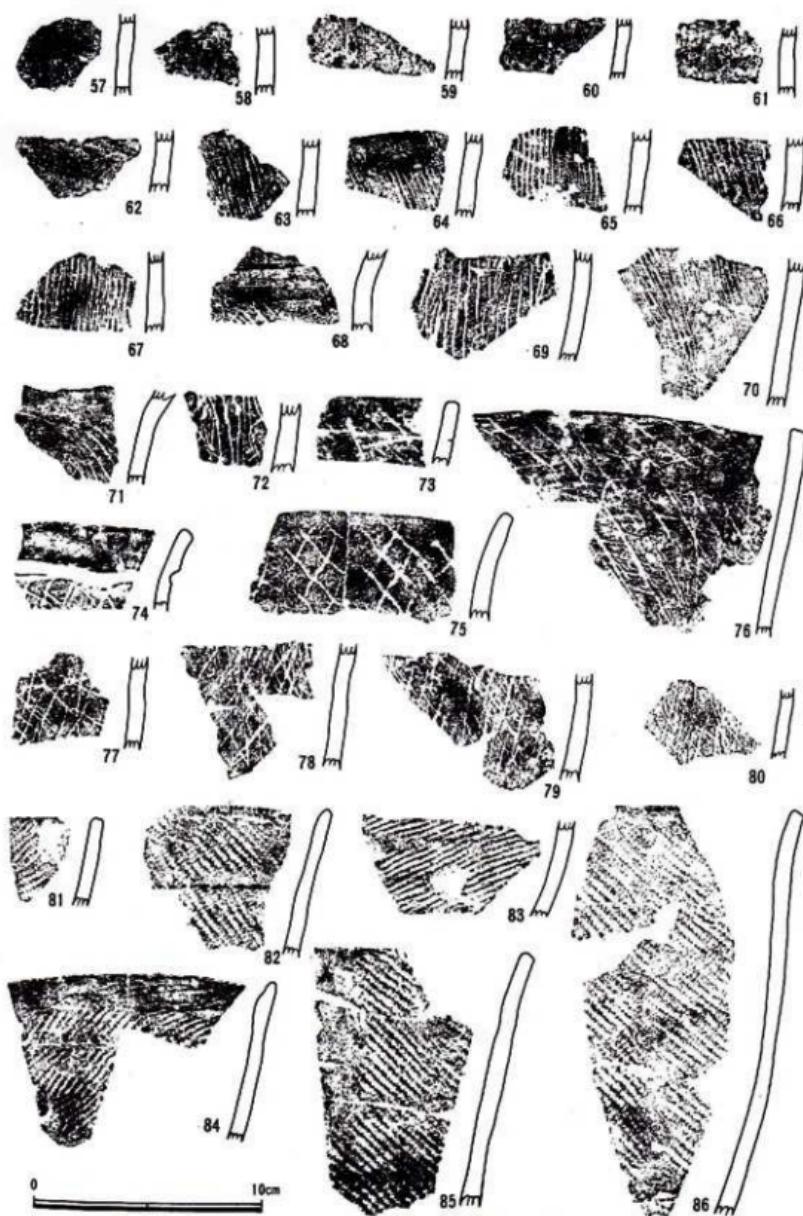
第28図 A区遺構外出土土器拓影図(2)

(2) 石器 (第30図、31図)

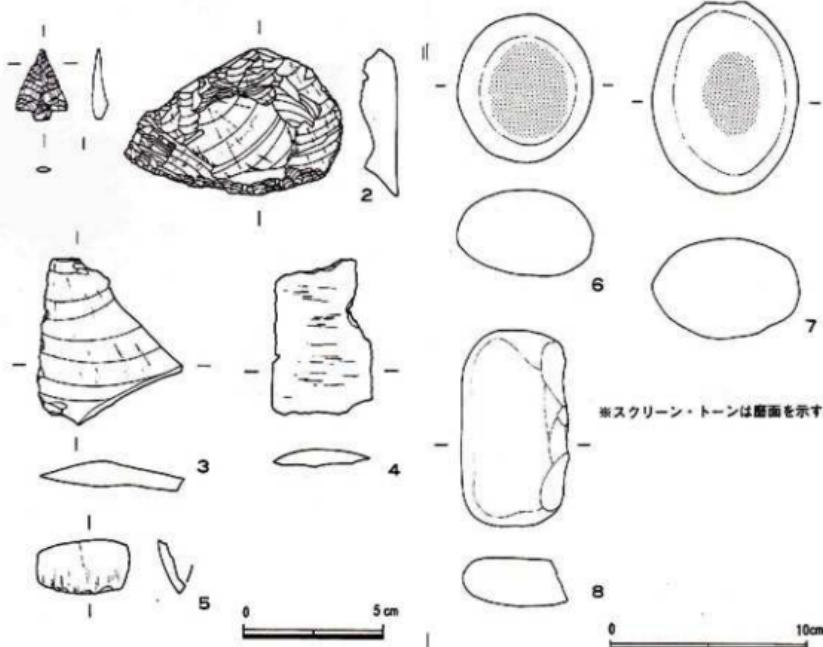
A区調査区内から8点の石器が出土した。いずれも遺構外、基本層序第Ⅲ層からである。このほか昭和51年の調査の際、磨製石斧4点が出土している。

石鏃 (1)

平基有茎鏃、最大長2.6cm、重さ1.4gを計る。茎部を半分ほど欠くが、その残存部分にアスファルトの付着がみられる。石材は珪(硬)質頁岩である。



第29図 A区遺構外出土土器拓影図(3)



第30図 A区造構外出土石器実測図(1)

搔器 (2、3)

2は、全体に大まかな整形剥離を加え、その後下側縁にいねいに刃部を作りだしている。

3は、側縁部の一部にこまかい刃こぼれ痕がみられる。石材はいずれも珪（硬）質頁岩である。

磨製石斧 (4、5)

4は、石斧頭部より剥離したもの、5は刃部破片である。製作技法は不明。石材は、4が石英安山岩、5は緑色凝灰岩である。

磨石 (6、7)

円形または楕円形を呈した7.5 cm~10cm大の川原石を用い、その平坦な面を磨面としている。

重さは6が295 g、7が420 gである。石材はいずれも石英玢岩である。

敲石 (8)

扁平な川原石の長軸一侧縁を打ち欠くものである。重さ228 g、石材は石英安山岩である。

(藤井安正)

(3) 土製品・石製品(第32図)

遺構外より出土した土製品・石製品は、円盤状土製品3点、球状石製品1点である。

円盤状土製品(1~3)

土器胴部片及び口縁部片を利用し、打ち欠き、研磨により、円形、三角形に整形しているものである。すべて完形品である。

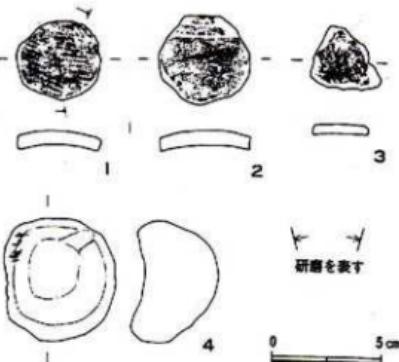
1、2は円形を呈するもので、1はS-2グリッド、IIId下層より出土したものである。

胴部片を打ち欠き後、研磨により整形している。文様はLR縄文を施している。2はS-2グリッド、IIId下層、44号配石遺構近傍より出土したものである。横位に2条の平行沈線文を施している口縁部片を利用し、打ち欠きにより整形している。大きさはそれぞれ、最大径3.8cm、4.1cm、厚さ0.6cm、0.7cmを計る。

3は三角形を呈するもので、胴部片を打ち欠きにより整形している。U-6グリッド、IIId下層より出土したものである。文様はRL縄文を施しており、大きさは最長辺3.2cm、厚さ0.4cmを計る。

球状石製品(4)

S-6グリッド、IIId下層より出土したものである。全面を磨って半球状に整形している。平面部は幾分凹み、断面形は椀状に近い形を呈する。大きさは径5.5cm、高さ3.8cm、重さ41.9gを計る。石質は軽石である。



第32図 A区遺構外出土土製品・石製品

(佐藤 樹)

第IV章 C区の検出遺構と出土遺物

C区からは、発掘区ほぼ全域を覆う礫群が検出され、ダンボール箱9箱余の縄文時代後～晚期の土器、石器、土製品等の遺物の出土があった。

1. 磨群（第33図）

（1） 磨群の分布状況

C区からは多量の4～43cm大の礫が検出された。これらの礫は、明らかに配石遺構を構築する石とは、その大きさ、形状において異なり、さらには人為的に配置された痕跡も認められない。

礫の総数は8500点以上で、C区のほぼ全域を覆うが、発掘区中央部西側（Z I、ZH-109、110グリッド）、東側（ZF、ZE-110、111グリッド）及び西部（Z I、ZH-105～107グリッド）の分布密度が高い。C区の現地表上はほぼ平坦であるが、大湯浮石降下以前はかなりの起伏を有し、概むね南西端（Z G、ZF-105グリッド）を最下位とする緩斜面を成している。礫の分布密度の高い部分はこれらの緩斜面上方から微高地にかけてであり、土器を初めとする遺物が南西端ほど多く出土する傾向とは、その分布状況が異なる。

層位的には、これらの礫はⅢa～Ⅳ層上位から検出され、Ⅲd～Ⅳ層上位の分布密度が高い。Ⅲa～Ⅳ層上位からは縄文時代後～晚期の遺物の出土があり、この磨群の形成時期は広くみても縄文時代に限定できると考えられる。なお、磨群下及びその近傍から磨群と関連する遺構は確認されていない。

礫は5～15cm大の小型のものが多く、角礫が目につく。風化、亀裂、破碎した礫等様々であり、火熱を受けている礫も若干見られる。岩質は後述のように石英安山岩、火山噴凝灰岩、石英閃綠玢岩等多種多様である。

本来、この種の礫はⅢ～Ⅳ層中には存在しない。安山岩質の礫は申ヶ野火山灰層（V層）中に含まれるが、その大きさ、形状により磨群のそれとは区別される。またその含有量が少なく、V層より何らかの事由により掘り出された可能性は低い。また水流により遠方から運ばれた痕跡を有せず、風等他の自然的要因により形成されたとは考えられない。このようなことから、何らかの目的で、縄文人が他の場所から持ち込んだものと推察される。規則的な配列、構造を呈しないのは、後の自然的要因による破壊か、もともと規則的構造物ではなくてある一定の空間を示す概念のものと考えられる。

同種の磨群は第1次調査地（A区）の北西部及び北東部や第2次調査地（B区）でも検出されており、C区ではさらに北西側や南東側に延びるものと予想される。

（秋元信夫）

(2) 碳群の岩質およびその特徴

ほぼ全域から多量に検出された礫は亜角礫で、5~10cm大のものが多く、分布状態からみても配石造構とは異なる様相を呈している。配石造構の石が石英閃綠玢岩を主体としているのに対して、安山岩系統の石が多い。岩質からみても多種多様で、肉眼によって次のような種類の岩石に同定される。

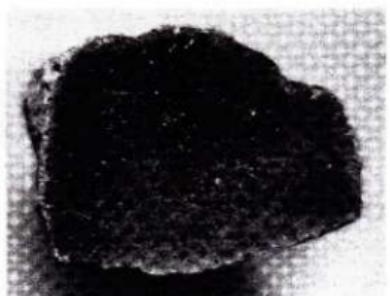
流紋岩・ラビリタフ（火山礫凝灰岩）・石英安山岩・輝石安山岩・輝石角閃石安山岩・砂岩・石英閃綠玢岩・スコリア・粘板岩など。これらの礫は、幾分水の作用をうけた様子もみられるが、配石造構でみられたようなきれいで水磨されたものは少なく、比較的ゴツゴツしている。また風化しているもの、割れ目・破さいの跡のみられるものもみつかる。多くみつかる岩石の特徴をあげると

- ①ラビリタフ（火山礫凝灰岩） 泥岩・シルトなどの水成碎屑物をレンズ状に含み、バッチ状の岩片・石英粒がみられる。マトリックスは黄褐色を呈している。
- ②輝石安山岩 青灰色~暗灰色を呈し、緻密・堅硬である。にぎりこぶし大の礫としてたくさんみつかる。表面が風化しているものもあるがゴツゴツしているものが多い。
- ③石英安山岩 暗灰色。気泡の発達した岩片で、石英はみあたらない。斜長石と思われる白色の斑晶が大きく、輝石の斑晶もみられる。

(3) 申ヶ野火山灰層中の安山岩質の礫との比較

申ヶ野火山灰層は降下型の火山灰でその分布状態からストロンボリ式の噴火による堆積とされている。下位に安山岩質の礫を含み、風化のすんだ大型の軽石で特徴づけられる。今回の礫群の礫も申ヶ野火山灰層を起源とするものが多いのではないだろうかという仮説をたてて調査を行ったが、①申ヶ野火山灰層中の安山岩質の礫は20~30cm大のものが多いのに対して、礫群のそれは小粒で、岩質的にも多種にわたる。②申ヶ野火山灰層中の礫は下位に多く地積し、遺物包含層との間に比較的間隙があること。などから、いくらかは混入されていると予想されるものの多種にわたる礫群の礫は、明らかに他地域から人の作用をうけて搬入されたものと思われる。気泡を含む石英安山岩・ラビリタフ・輝石安山岩の特徴をもとに考えると、「遠部層」と呼ばれる地層を礫の起源としたほうが妥当と考えられる。「遠部層」（第4図）は、秋田県地質図幅「花輪」（1973）によると、黒又山・軍森・鹿倉山の山体をつくる気泡を含む石英安山岩と、育梁山脈の西側（根市・二本柳地域の山）を構成する。ラビリタフ（石英粒を含む）と輝石安山岩類で特徴づけられるという。このことから、なんらかの人的作用によって、近くの山体から搬入したものと思われる。

（成田典彦）



1. 麻石・角閃石安山岩



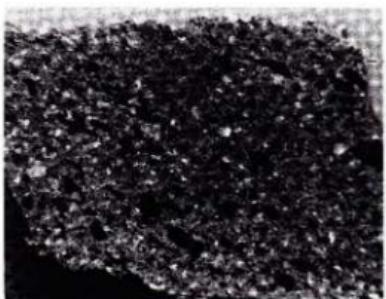
2. 流紋岩



3. スコリア



4. 石英安山岩



5. ラビリタフ



6. 砂岩



2. 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第34図～47図)

C区遺構外からは10個体の復元可能土器とダンボール箱6箱の土器の出土があった。これらの土器は縄文時代後～晩期に位置づけられるもので、その大半は後期前葉のものである。

土器を初めとする遺物は、Z1～ZE-105、106、ZH～ZE-107グリッドに集中し、C区南西側ほど多くなる。層位的には、明らかに擾乱と考えられるI～II層出土の土器を除くと、IIIa～IIIc層上位からの出土であり、IIIb～IIId層の出土が多い。地山までの堆積土が厚い割には、縄文時代の文化層が薄く、IIIa～IIIb層から第II、III、V群の土器、IIIb～IIId層から第I、IV群の土器が多く出土する傾向を把握できる程度で、出土土器と層序との関係は明確にできなかった。また復元土器が少なかったこともあり、分類は施文技法及び特徴的文様の相違によった。

第I群 後期初頭～前葉の土器

本群は、縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器類で、東北地方北部の前十腰内、十腰内I式、南部の両境式に比定できる。施文技法、主要文様により次のように細分した。

1類 隆線文、隆沈文の土器 (第38図1～5)

a. 本類は隆線により文様を施す土器類で、2点(1、4)が該当する。1は深鉢調部片で、隆線には整形が加えられ、断面がかまばこ状を呈する。小破片のため文様は不明。焼成はやや良好、色調はにぶい橙色を呈する。4は大型の壺の口部部で、I群3類、IV群4類の可能性もある。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。本類の土器はZF-105、106グリッド・IIId層より出土している。

b. 本類は隆線上に縄文を有する隆沈文の土器類で、1点(3)が該当する。大型の深鉢あるいは壺の胴部中央の破片で、二条の横位隆線で区画された胴部上半に隆線文が展開する。隆線上の縄文はLR施文、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。ZH-106グリッド・IIId層の出土である。

c. 本類は隆沈文により文様が施文される土器類で、1点(5)が該当する。鉢あるいは浅鉢の胴部片で、文様は隆沈文による幾何学文と考えられる。焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈する。ZF-105グリッド・IIId層の出土である。

2類 地文上に沈線文が施文された土器 (第39図36～39)

本類は縄文や撚糸文を施文した器面上に沈線文が描かれた土器類である。地文にはRL縄文、撚糸文、網目状撚糸文が使用されている。36、37には横位平行沈線文や平行沈線による曲線文、38、39には1条の横位沈線文が施文されている。いずれも焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。ZF、ZE-106、ZH-113グリッドのIIId～IIId層の出土である。

3類 沈線文を主体とする土器（第34図2、3、38図6～35、45図213、224）

本類には無文地に沈線文が施文された土器類を一括した。口縁部文様や文様帶区間に隆沈文が使用されているものや格子目状沈線文等も本類とした。

a. 本類は縦位文様を特徴とする土器類（3、12～14、17、24）で、波状口縁頂部下にS字状文、C字状文、弧状文等が縦位に施文されている。胴部が張り、口縁部が外反する深鉢の他口縁部が内擣する深鉢もみられる。焼成はやや良好で、色調は明赤褐色、にぶい赤褐色を呈する。本類の土器はZF-107、109、110、ZG-108グリッドのⅢb～Ⅲd層より出土している。

3は6つの頂部をもつ波状口縁で、胴部が張り口縁部が外反する深鉢形土器である。推定口径24.5cm、推定器高34.8cmを計る。平行沈線文により区間された胴部上半には、波状口縁頂部下に不規則な縦位入組状曲線文、それらの間に梢円形文、幾何学文等が施文されている。

b. 本類は曲線文、直線文が無方向に展開する土器類（6～9、16、20、21、25～27）である。口縁部には平行沈線文や円文をはさんだ長方形文が沈線や隆沈文により施文されている。また胴部には沈線による渦巻文、曲線文等が施文されている。これらの土器はいずれも焼成が良好で、色調はにぶい橙色、にぶい褐色を呈する。

c. 本類は曲線文や幾何学文が横位方向に展開する土器類（10、11、15、22、23、28）である。横位平行線文、長方形文等が沈線により施文されている。深鉢、鉢、壺等がみられる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈するものが多い。ZG～ZE-105、106グリッド等のⅢb～Ⅲd層の出土である。

d. 本類は格子目状沈線文の施文された土器類（29～34、213、224）で、口頭部の平行沈線文下から胴部下半にかけ、沈線により格子目状文が施文されている。ほとんどが深鉢で、焼成は良好、色調はにぶい褐色、にぶい橙色、灰褐色等を呈する。ZE-106グリッド・Ⅲb～Ⅲd層より集中して出土している。

4類 磨消繩文を主体とする土器（第38図18、39図40～65、40図66～97）

a. 本類は横位方向に展開する入組状曲線文を特徴とする土器類（18、45～58、61～64）である。胴部上半の文様帶に横位方向に連続した入組状曲線文が一巡する。また口縁部に花弁状文等が施文されているものもある。これらの文様は2～3条の沈線で施文され、LR、RLあるいはL繩文が充填技法や磨消技法により施文されている。本類には深鉢、鉢、壺等がみられる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、灰褐色を呈するものが多い。ZG～ZE-105～107グリッド等のⅢb～Ⅲd層から出土している。

b. 本類は幾何学文が横位方向に展開する土器類（60、73、80～83、86～96）である。文様は口縁部から胴部上半に限定され、直線的な線により構成される。胴部には階段状文（91）、

直角に折れ曲った文様（90、92、94）、長方形文（73、81、95、96）等が施文され、口縁部には花卉状文が付加されるものもある。これらの文様は2～3条の平行沈線により施文され、磨消技法や充填技法により沈線間にのみ繩文をつけ、帯状文による文様としている。地文にはLR繩文が多用され、他にL繩文が使用されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、灰赤色、にぶい赤褐色を呈するものが多い。本類にも深鉢、鉢、壺等がみられる。ZE-106、ZF-105～107グリッド等のⅢb～Ⅲd層より出土している。

c. 本類は横位平行沈線文を特徴とする土器類（40、59、66～72、74～79、84、85、97）で、2～3条の平行沈線間に繩文が磨消技法により施文されている。地文にはLR繩文が多用され、他にR L、L繩文が使用されている。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色、灰褐色等を呈する。前類と同様、深鉢、鉢、壺等の器種がみられる。ZE-106、108、ZF-105～107、109、110、ZG-105、ZH-107グリッドのⅢb～Ⅲd層からの出土である。

第Ⅱ群 後期中葉の土器

本群は繩文時代後期中葉の土器であり、東北地方北部の十腰内Ⅱ、Ⅲ式、南部の宝ヶ峯式に比定できる。

1類 平行線化した磨消繩文帯を有する土器（第41図119～121）

口縁部の7条ほどの平行沈線文部分に磨消技法により繩文が施文されている土器類で、119～121は同一個体と考えられる。山形小突起をもつ深鉢形土器で、底部から口縁部にかけ外傾する筒形と考えられる。地文はLR繩文、焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。ZE-106グリッドのⅢb～Ⅲd層上位からの出土である。

2類 幅の広い磨消繩文の土器（第35図4、36図5、6、41図98～118、123）

磨消繩文により曲線文、直線文の施文される土器類で、I群4類が2～3条の平行沈線文で文様が構成されるのに対し、本類は1条の沈線により文様が施文され、磨消繩文帯の幅も広い。文様帯は胴部下半にまで及び、渦巻状文などの曲線文、横位方向の帯状文などが施文されている。細繩文が多用され、地文はほとんどLR繩文である。深鉢、鉢、壺の他に切断蓋付土器（4）や円筒形の土器（111）もみられる。深鉢には大きな装飾突起を有するもの（98～101）もある。鉢や小型の土器は比較的薄手のものが多く、焼成は非常に良好である。色調はにぶい橙色、灰褐色、にぶい褐色等を呈する。本類の土器はC区南西部各グリッドのⅢb層より多く出土している。

3類 磨消繩文に刺突文が伴う土器（第42図126～135）

曲線的な磨消繩文を構成する沈線に、連続刺突文が付加されている土器類で、刺突は磨消繩文側に施文されている。地文にはLR組繩文が使用されている。焼成は非常に良く、色調は灰

褐色を呈するものが多い。2類と同様、突起を有する深鉢等がみられる。ZE-106グリッド・IIIb層からの出土が多い。

4類 多条沈線文の土器（第42図 138～141）

やや太めの沈線で文様を施し、その内部に細めの沈線や刻み目状沈線が充填される土器類である。138～141は同一個体と考えられる。口縁部が内擣する壺あるいは注口土器の口縁部及び脇部で、口縁部の隆線上には斜方向の刻み目がつけられ、隆線下には沈線が添えられている。やや薄手の土器で、焼成は非常に良く、色調は灰褐色を呈する。ZF-106～108グリッド・IIIb層からの出土である。

第三群 後期後葉の土器

本群は縄文時代後期後葉に位置づけられる土器で、東北地方北部の十腰内IV式、南部の新地式に比定できる。

1類 入組帶状文の土器（第41図 122）

入組帶状文と考えられる文様を有する土器で、深鉢調部片1点（122）が出土している。弧線により形成される入組帶状文内にはL R 縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。ZF-105グリッド・IIIb層からの出土である。

第四群 後期の土器

本群には、A区と同様、条痕文、撚糸文、縄文、無文の土器を一括した。

1類 条痕文の土器（第44図 176～182）

縦位方向の条痕文のもの（176～178）、横位方向の条痕文が加わるもの（179、181）、斜方向の条痕による弧線文が加わるもの（180、182）等がある。本類の土器はすべて深鉢で、平口縁と考えられる。焼成は良好で、にぶい橙色を呈するものが多い。

2類 撥糸文の土器（第44図 183～207、45図 208～224）

単軸絡条体の回転押捺文の土器を本類とした。軸への条の巻き方により、次のように細分される。

a. 撥糸文の土器（183～185、188～191、193、195、196）

本類は、軸の周囲に条を單一方向に巻いたものを縦位方向に回転押捺した文様を有する土器類である。口縁部を無文としているもの（183、190）や口縁部無文帯に撚糸圧痕文を有するもの（191）などがある。軸に巻かれる条はRまたはL縄文である。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色等を呈する。

b. 網目状撚糸文の土器（210～212、214～223）

本類は2本の条を用い、一方を右巻に、他を左巻にしたものを縦位方向に回転押捺した文様を有する土器類である。条の巻き方には、交叉部分が交互に上下するものと、同一方向のみが上となるものがあるが、後者がほとんどである。条にはR繩文が多用されている。口縁部に無文帯を有するものがほとんどで、口頸部に横位沈線文が一巡するもの（211）もある。これらの土器の焼成は良好で、色調は橙色、にほい橙色、にほい褐色等を呈する。

c. 連鎖状撚糸文の土器（186、187、192、194、197～208）

本類は撚糸が弧をなして次々に重なった文様を有する土器類で、1ヶ所前に巻いた条を跨がせた部分を有する單軸絡条体を縦位に回転押捺し、文様が施文されている。前類と同様、口縁部が無文となるものが多い。条にはR繩文が多用される。焼成は良好なものが多く、色調はにほい橙色、褐色、橙色等を呈する。

d. 亀甲状撚糸文の土器（209）

輪の上下に規則的に交叉部分が繰返されている絡条体を縦位に回転押捺した文様（單軸絡条体第2類：山内、1979）を有する土器で、ZE-107グリッド・Ⅲd層より深鉢胴部片1点の出土があった。条にはR繩文を使用、焼成は良好で、色調はにほい褐色を呈する。

第2類土器はほとんどが深鉢で、大型のものが多い。平口縁で、胴部上半が張り、口縁部が外反する器形を呈する。

3類 繩文の土器（第36図7～9、45図225～239、46図240～266）

口頸部の撚紐圧痕文や平行沈線文以外に文様を有せず、繩文を主文様とする上器類を本類とした。撚紐圧痕文、口縁部無文帯の有無により次のように細分した。

a. 撥紐圧痕文が無文部分と繩文部分を画するもの（225、226、230、231）

胴部上端の口縁部無文帯との境界に1条あるいは2条の撚紐圧痕文を有する土器類で、繩文は胴部上端から下半にかけて施文されている。その原体にはLR繩文が多用され、撚紐圧痕文の原体も胴部繩文と同一種類のものが使用されている。

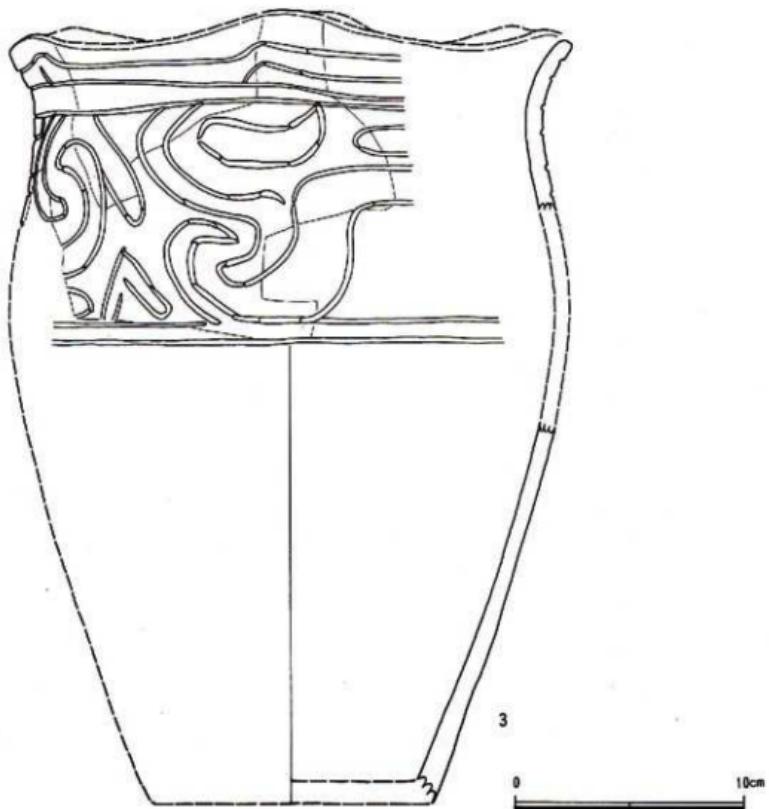
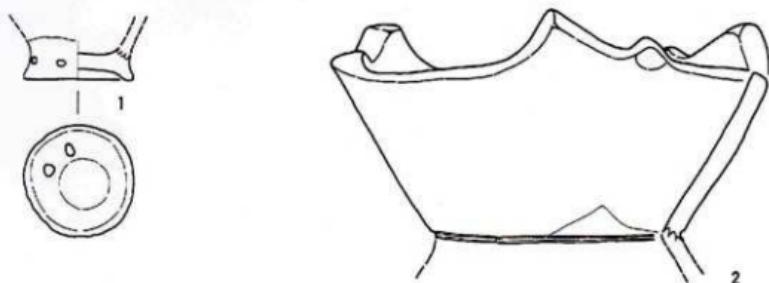
b. 口縁部に無文帯を有するもの（9、227～229、232～234、255）

撚紐圧痕文、沈線文等の区画文を有しないが、口縁部に無文帯を有する繩文の土器を本類とした。地文にはLR繩文が多用され、RL繩文がそれに次ぐ。なお227の口唇部にはLR繩文が施文されている。

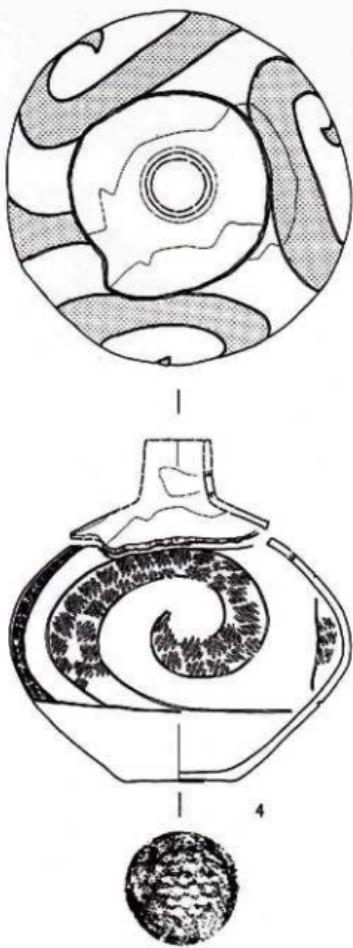
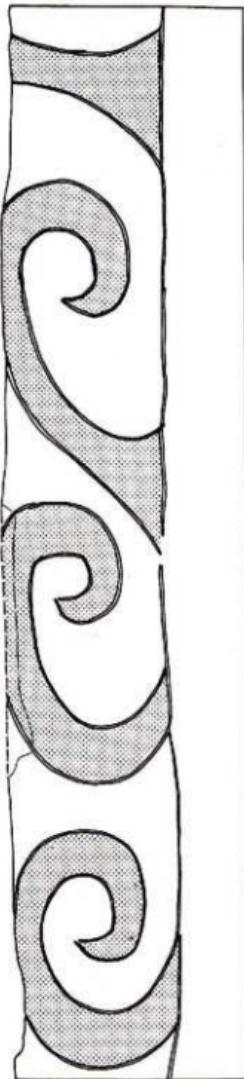
c. 口縁部ほぼ上端から繩文が施文されるもの（7、8、235～250、261）

口縁部に無文帯を有せず、ほぼ口縁部上端から胴部下半にかけて繩文を施文する土器類を本類とした。地文にはLR繩文が多用され、他にRL、L繩文のものもみられる。

第3類土器には、7、8のような浅鉢や鉢もみられるが、そのほとんどは大型の深鉢で、次いで壺が多い。焼成は比較的良好で、色調はにほい橙色や橙色を呈するものが多い。

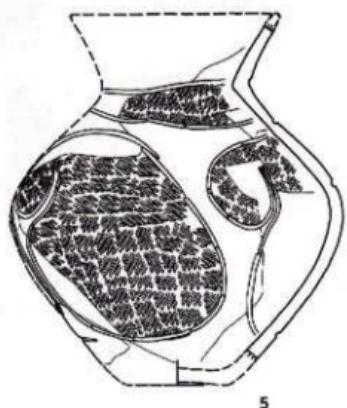


第34図 C区遺構外出土土器実測図(1)

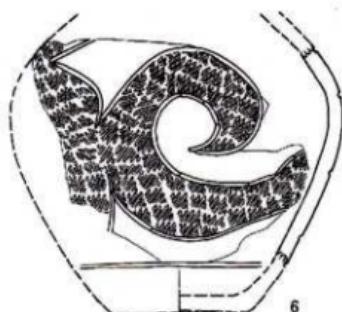


0 10cm

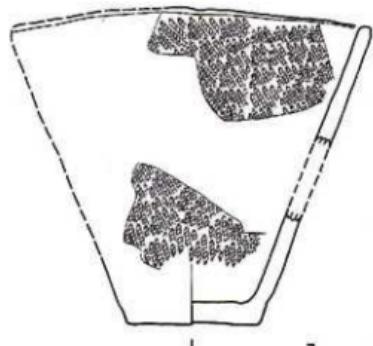
第35図 C区遺構外出土土器実測図(2)



5



6

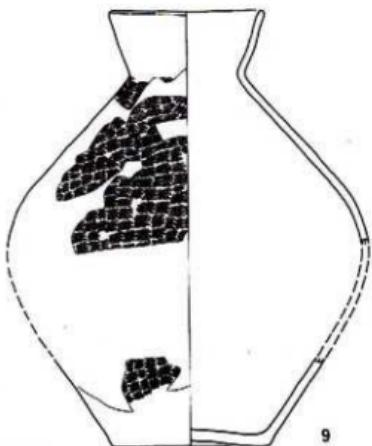


1

7



8



9

No.5～No.8縮尺 2/5
No.9縮尺 1/5

第36図 C区造構外出土土器実測図(3)

4類 無文の上器 (第43図 142～175)

本類は3類の縄文のみ施文された土器に次いで多い。深鉢、鉢、浅鉢、壺、台付上器等があり、比較的小型のものが多い。平口縁のものがほとんどであるが、145のように波状口縁のももある。143は折り返し口縁、142は折り返し口縁下に沈線が付加されている。また164のようにII唇部にR L縄文を施文しているものもみられる。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色、浅黄橙色、淡橙色、灰褐色等を呈する。

第V群 晩期前葉の土器

晩期の土器の出土量は少なく、1個体の注口土器と鉢形土器片数点の出土があったのみである。これらの土器は、晩期前葉の大洞B～B C式に位置づけられる。

1類 入組状三叉文の土器 (第37図10)

入組状三叉文の施文された土器類で、1点 (10) が本類に該当する。最大胴径11.6cmを計る注口土器で、口縁部と注口部のほとんどを欠いている。胴部上半に入組状三叉文が施文され、器面全体は入念にみがきがかけられている。焼成は非常に良く、色調はにぶい褐色を呈する。

Z E - 106 グリッド・IIIb 層からの出土である。

2類 平行沈線文と刺突文を有する土器 (第42

図136、137)

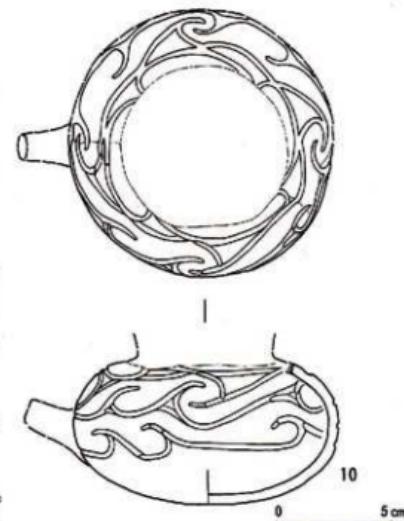
鉢形土器口縁部片2点 (136、137) が本類に該当する。II縁部に4～5条の平行沈線文が施文され、沈線間に斜方向の竹管圧痕文が付加されている。また胴部にはL R縄文が施文されている。いずれも焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。Z F - 113 グリッド・IIIb 層からの出土である。

(秋元信夫)

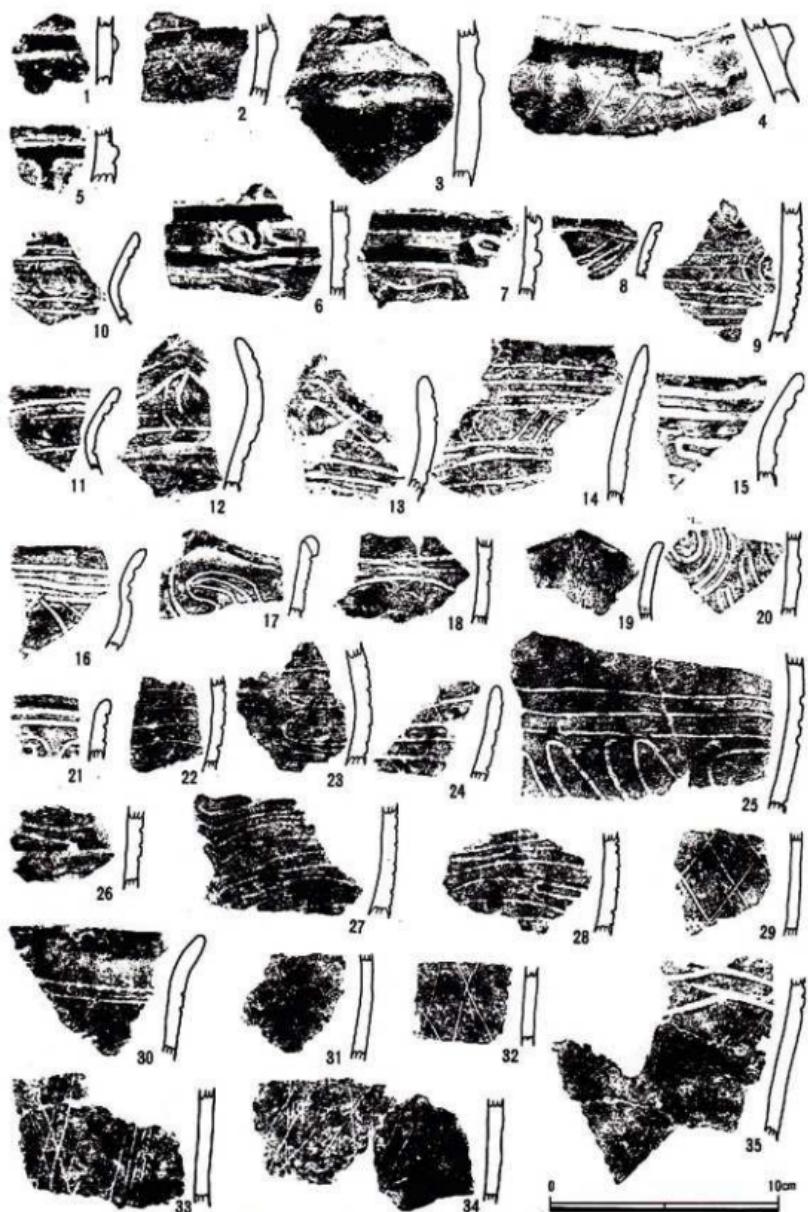
(2) 石器 (第48図～50図)

C区調査区内より出土した石器は多種多様で、その内訳は石鎌、石錐、搔器、磨製石斧、石鍬、敲石、凹石、磨石、石皿で、総数58点である。これらの多くは万座環状列石寄りの調査区南西側、基本層序第IIIa～IIIc層からの出土である。

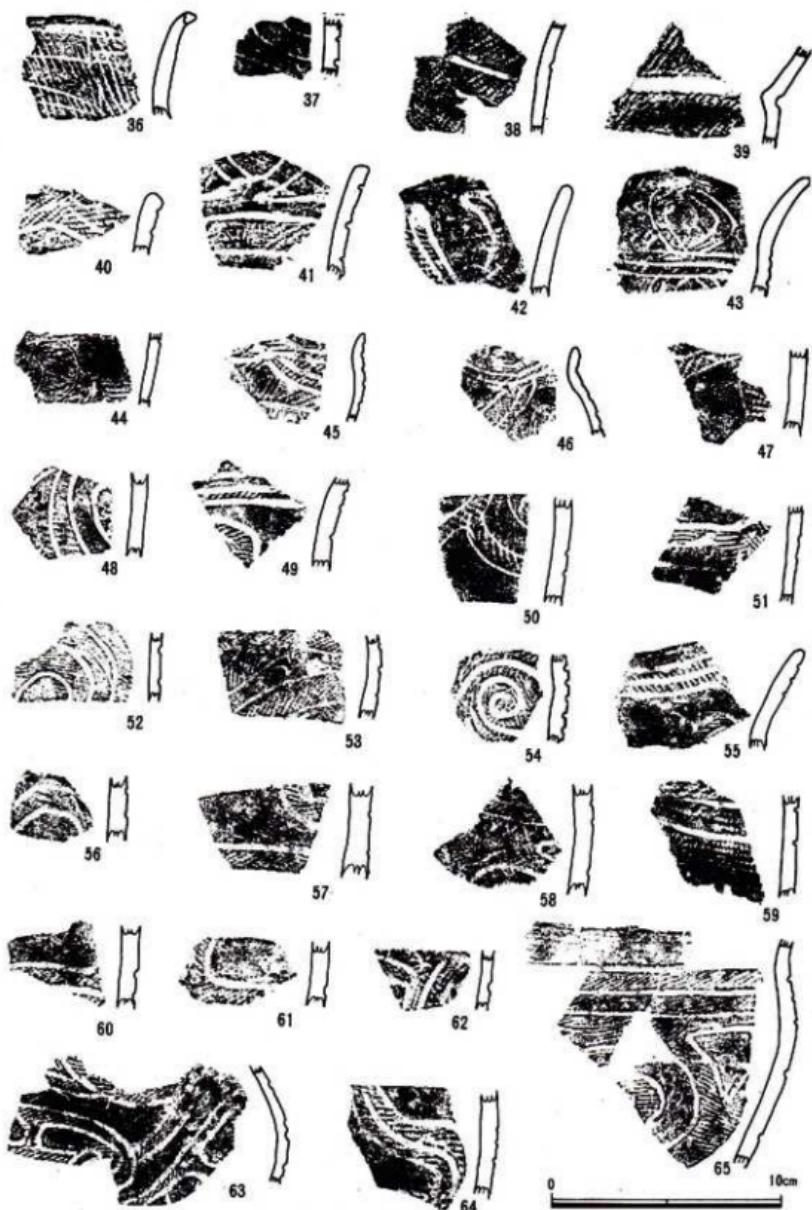
記述については、報告書(2)の分類をもとに行う。



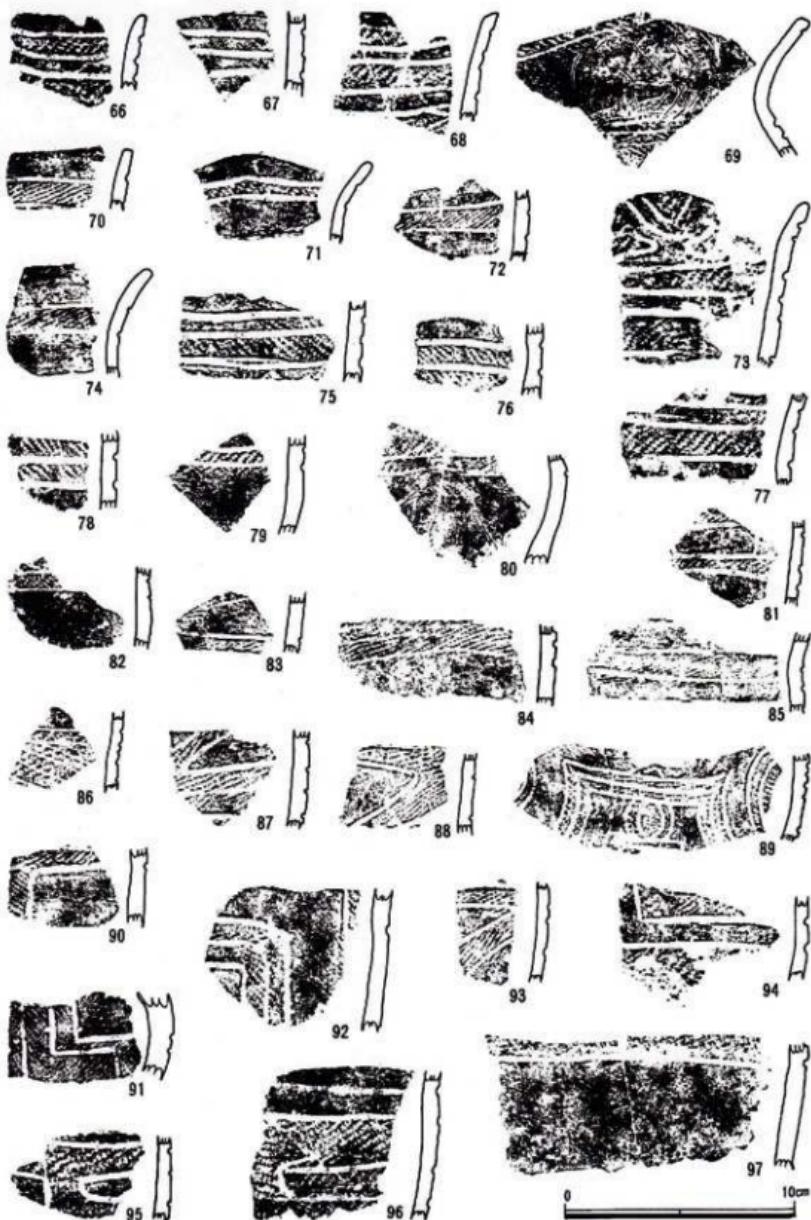
第37図 C区遺構外出土土器実測図(4)



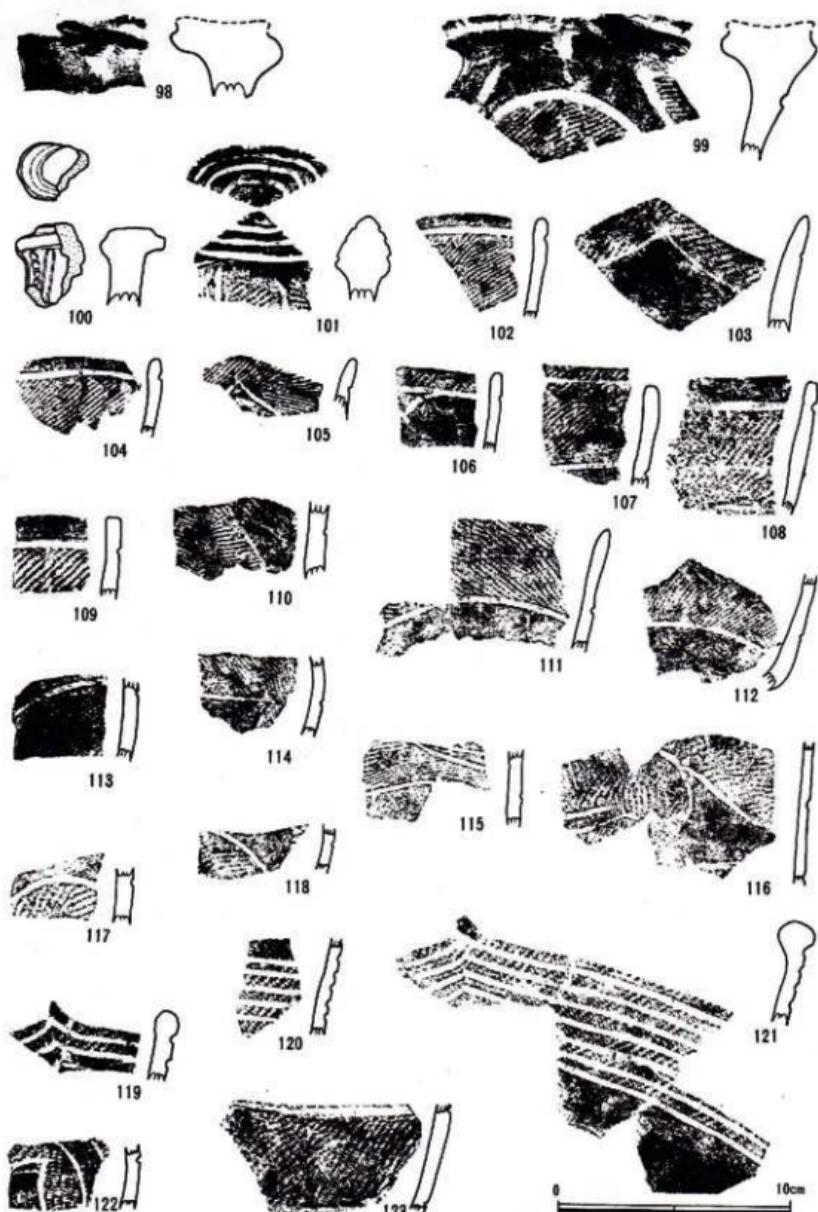
第38図 C区遺構外出土土器拓影図(1)



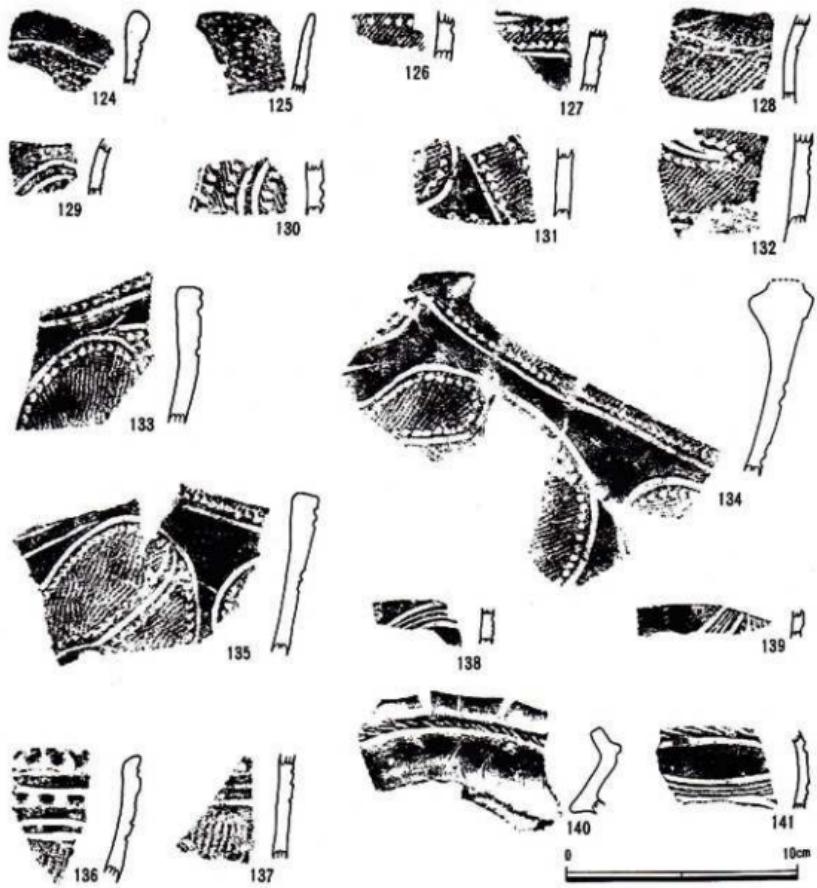
第39図 C区遺構外出土土器拓影図(2)



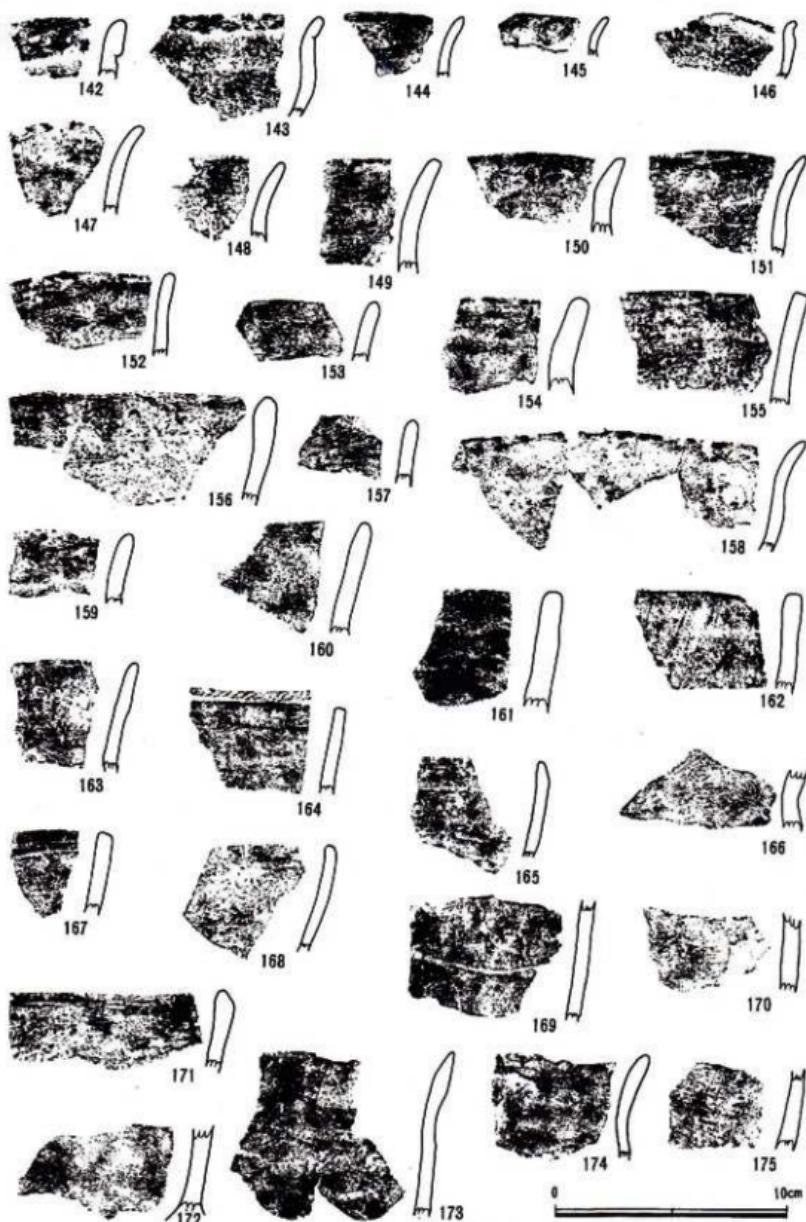
第40図 C区遺構外出土土器拓影図(3)



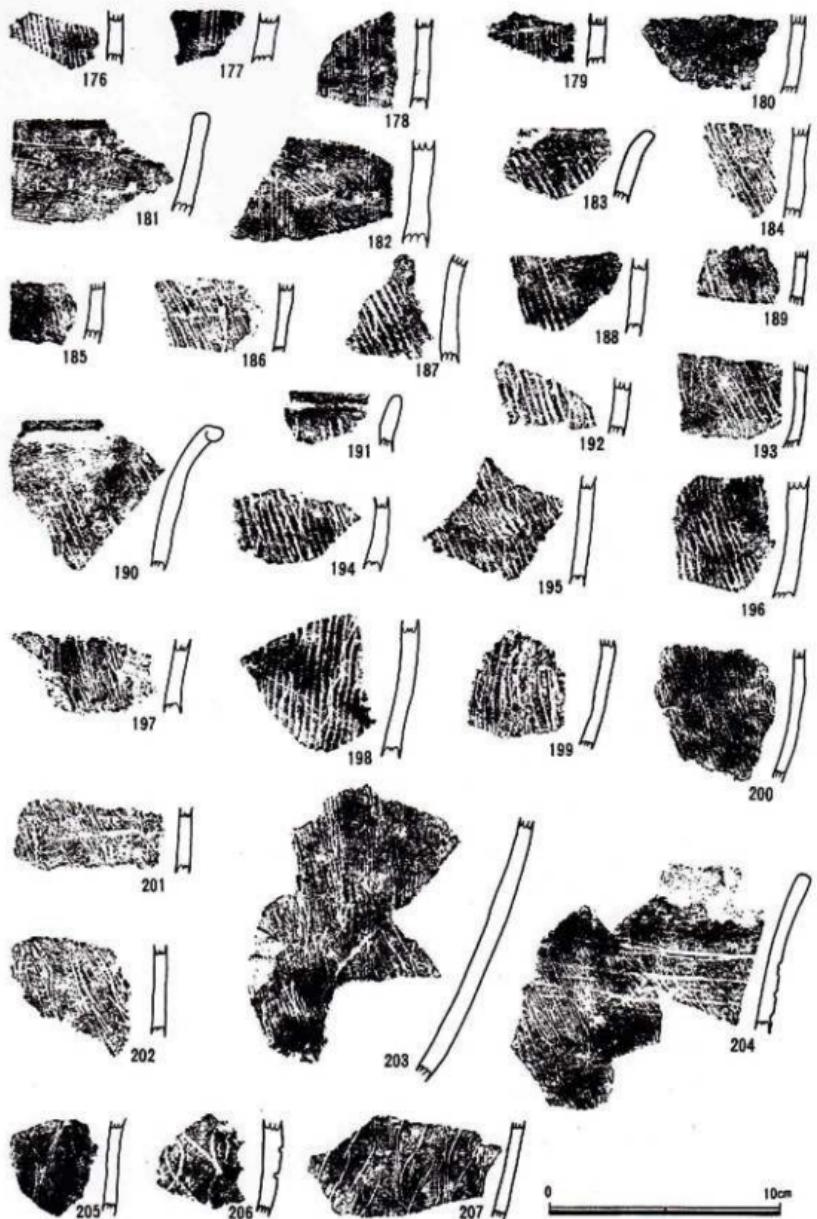
第41図 C区遺構外出土土器拓影図(4)



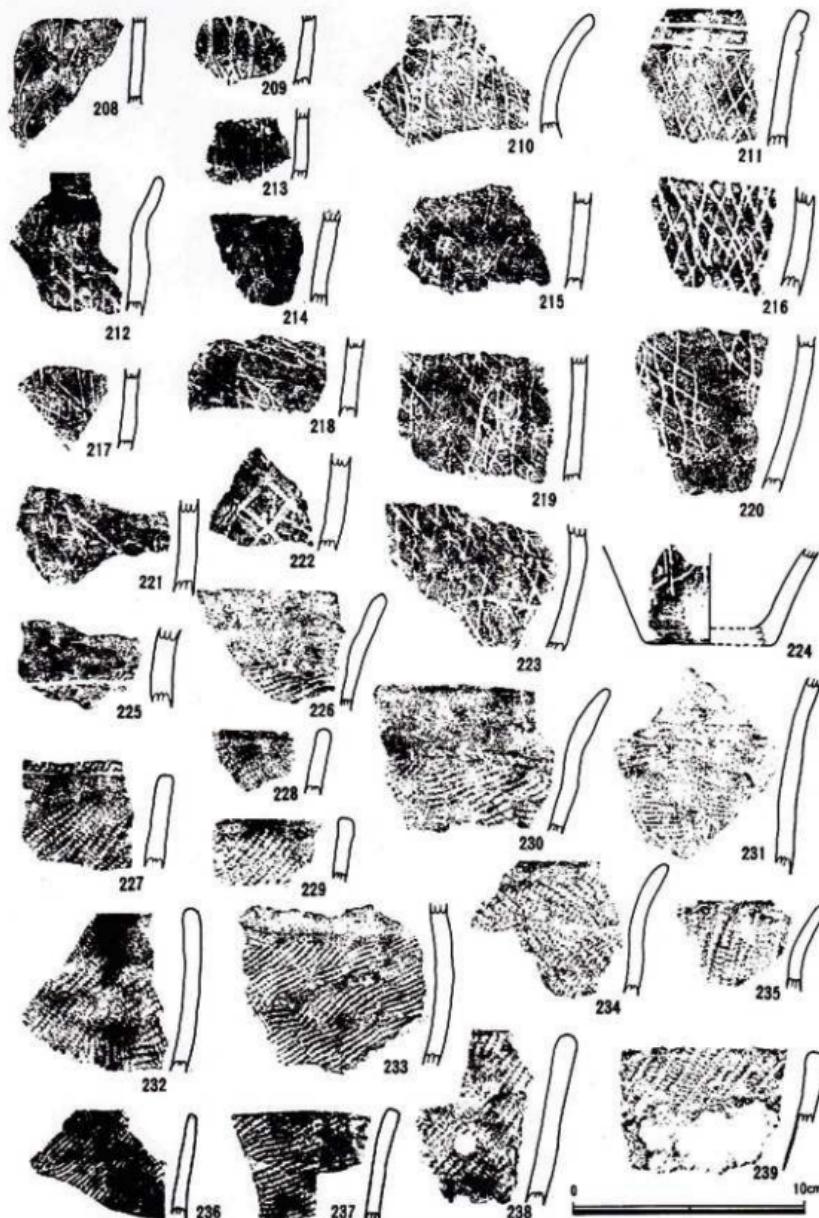
第42図 C区造構外出土土器拓影図(5)



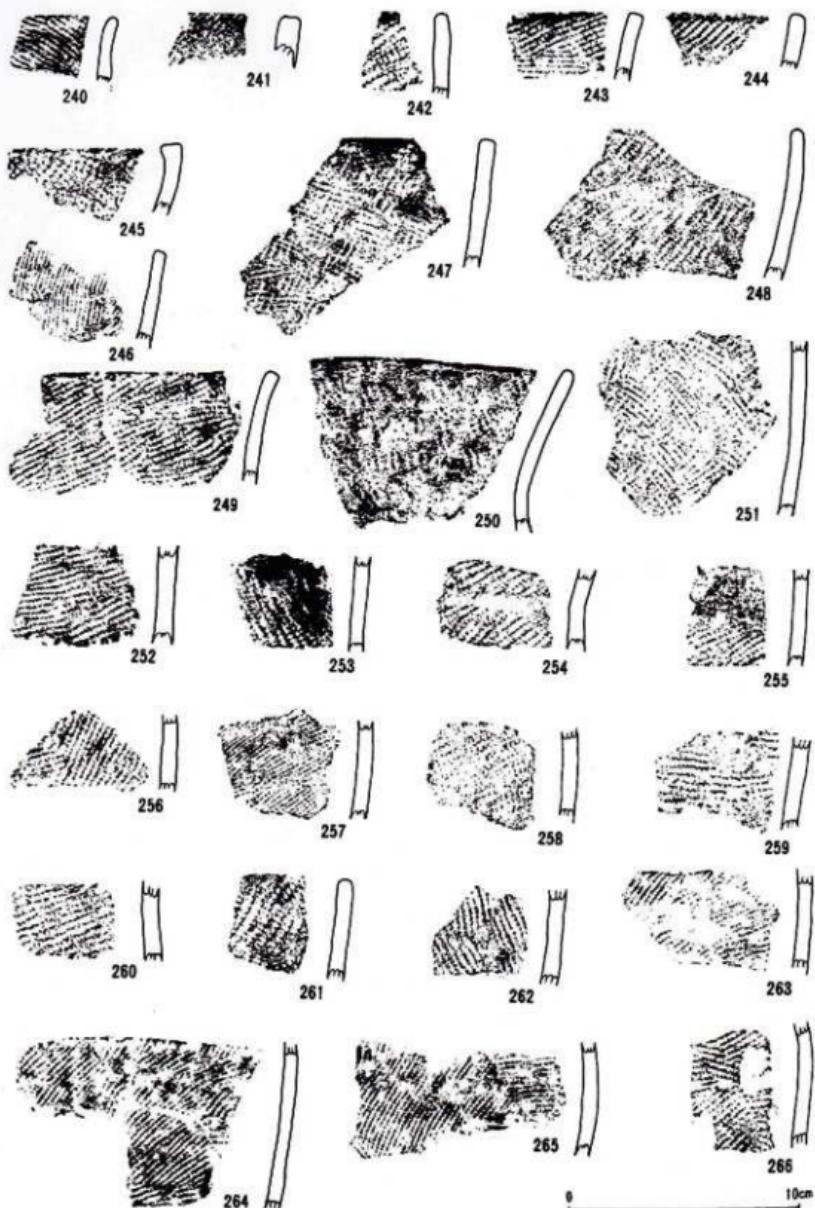
第43図 C区遺構外出土土器拓影図(6)



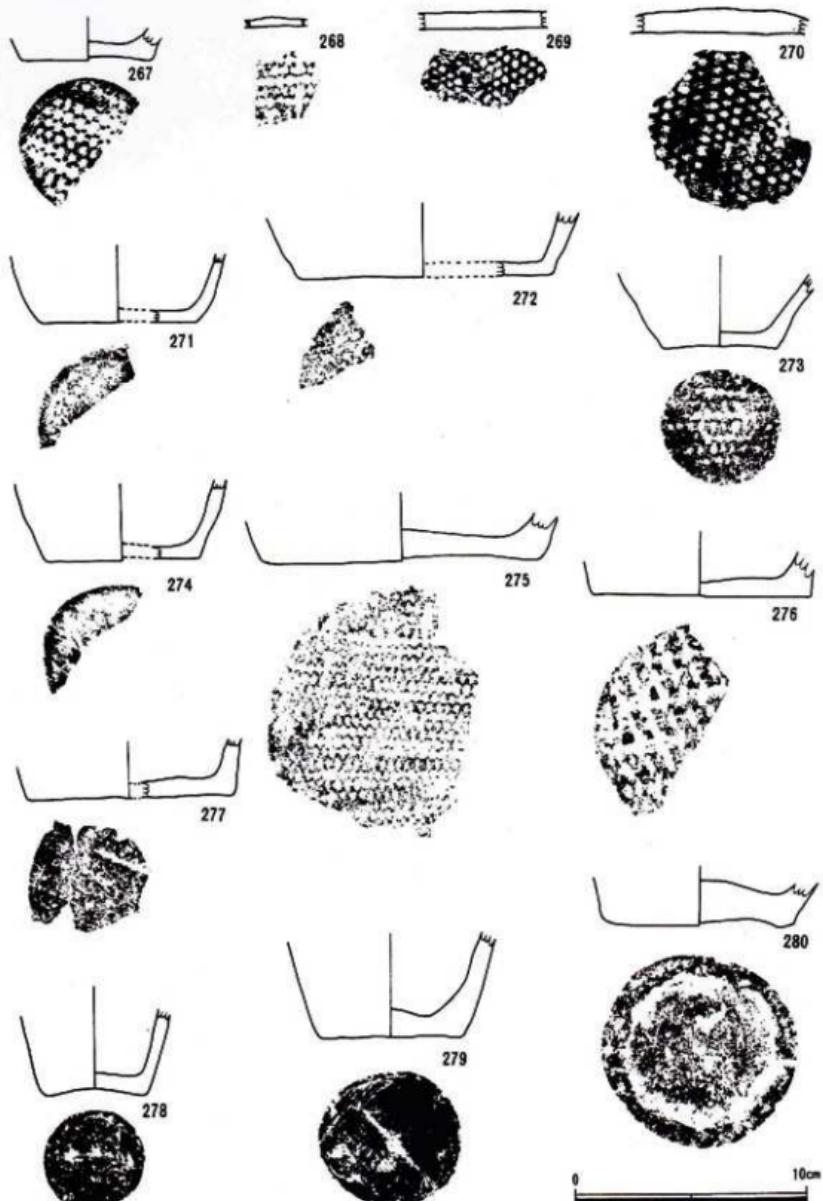
第44図 C区遺構外出土土器拓影図(7)



第45図 C区遺構外出土土器拓影図(8)



第46図 C区遺構外出土土器拓影(9)



第47図 C区遺構外出土土器拓影図⑩